

第4章 実態調査

実態調査では、23区内で2箇所、多摩地区で1箇所、計3箇所の公園において調査を行った。遊具については、事故件数の多い、すべり台、ぶらんこ、ジャングルジム、雲梯の4種とした。調査時間帯は、平日の午前10時から12時、午後1時から4時までとし、各公園で1日ずつ、計3日間実施した。

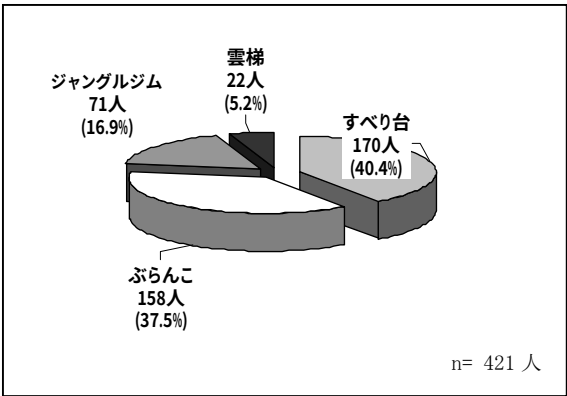
なお、今回の調査は限定された場所と時間で行ったことから、各遊具の利用割合やそれぞれの年齢の利用状況はあくまでそのときの状態であり、これが遊具利用全体の状況を示すものではない。

第1 年代別利用状況

各調査種別における子供の推定年齢別の利用状況については以下のとおりである。なお、推定年齢を2区分（0～5歳、6～12歳）とした。

【表4-1 推定年齢別利用状況】

種別	推定年齢		合 計 (種別別%)
	0～5歳	6～12歳	
すべり台	112 36.6%	58 50.4%	170 40.4%
ぶらんこ	118 38.6%	40 34.8%	158 37.5%
ジャングルジム	61 19.9%	10 8.7%	71 16.9%
雲梯	15 4.9%	7 6.1%	22 5.2%
合 計 (年齢別%)	306 72.7%	115 27.3%	421 100.0%



【図4-1 遊具の利用状況】

全調査数は、421人（延べ人数）であった。この中で最も子供が多く利用した遊具は、すべり台の170人（全体の40.4%）。次いで、ぶらんこが158人（37.5%）、ジャングルジムが71人（16.9%）、雲梯が22人（5.2%）であった。

年齢区分別利用者数をみると、0～5歳が306人（全調査数の72.7%）、6～12歳が115人（27.3%）となっている。また、各年代別の遊具利用者数は、以下のとおりである。

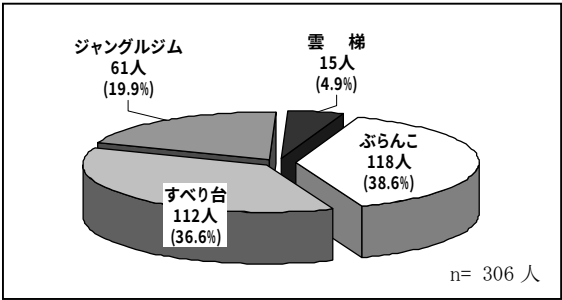
1 0～5歳

利用者は306人で、全調査数の72.7%であった。

遊具の利用率の多い順に並べると、

- ① ぶらんこ 118人（0～5歳全体の38.6%）
- ② すべり台 112人（〃 36.6%）
- ③ ジャングルジム 61人（〃 19.9%）
- ④ 雲 梯 15人（〃 4.9%）

となっている。ジャングルジムや雲梯といった年齢の高い子供向けの遊具の利用者数は少なく、利用する場合でも保護者が手を添えて遊んでいる場面が多く見られた。



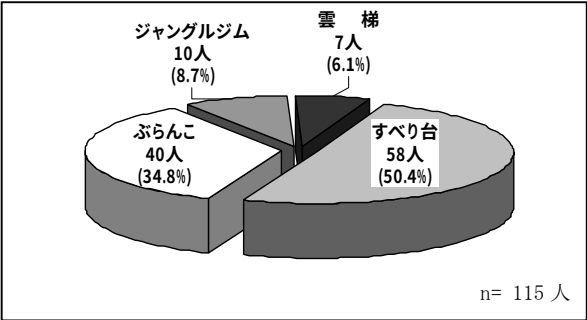
【図4-2 遊具の利用状況（0～5歳）】

2 6～12歳

利用者数は115人で、全調査数の27.3%であった。遊具の利用率の多い順に並べると、

- ① すべり台 58人 (6～12歳全体の50.4%)
- ② ぶらんこ 40人 (〃 34.8%)
- ③ ジャングルジム 10人 (〃 8.7%)
- ④ 雲 梯 7人 (〃 6.1%)

となっている。6～12歳は学校の終了時間の関係などで遊びにくる人数が少なかったが、すべり台やぶらんこの利用率が高かった。すべり台では、複数の子供たちが鬼ごっこや追いかっこの中で使用する姿がみられた。



【図4-3 遊具の利用状況(6～12歳)】

第2 利用時の子供の行動

利用時の子供の行動について、遊具の種別ごとにまとめた。

調査項目の行動については、社団法人日本公園施設業協会の『仲良く遊ぼう安全に(幼児編)』の「C. 代表的な遊具での注意事項」を参考にして、事例等の傾向を取り入れ、各遊具それぞれにおける危険が予測される行動項目を作成した。

1 すべり台

【表4-2 推定年齢別行動類型】 複数該当有り

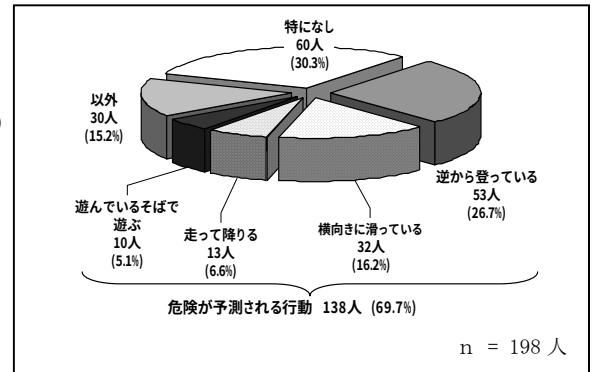
行動項目	推定年齢		合 計
	0～5歳 項目別%	6～12歳 項目別%	項目別%
逆から登っている	23 18.4%	30 41.1%	53 26.7%
上から物を投げる	2 1.6%		2 1.0%
走って降りる	7 5.6%	6 8.2%	13 6.6%
ぶらさがって遊ぶ			
順番を守らない			
遊んでいるそばで遊ぶ	8 6.4%	2 2.7%	10 5.1%
複数で滑っている	2 1.6%		2 1.0%
勢いよく滑る	1 0.8%		1 0.5%
横向きに滑っている	19 15.2%	13 17.8%	32 16.2%
後ろ向きに滑っている	1 0.8%	1 1.4%	2 1.0%
遊具の下にもぐっている			
落下防止柵の外に出ていた			
その他	15 12.0%	8 11.0%	23 11.6%
危険が予測される行動の合計	78 62.4%	60 82.2%	138 69.7%
特になし	47 37.6%	13 17.8%	60 30.3%
全 体 年 齢 別 %	125 63.1%	73 36.9%	198 100.0%

すべり台では、表 4-2 の 14 項目について行動調査を行い、調査総数は 198 人（延べ人数）となった。そのうち、危険の予測される行動がみられたのは 138 人で、全体の 69.7% を占めた。「逆から登っている」は 53 人（26.7%）と危険の予測される行動の項目の中で最も多くみられた。次に多かったのは「横向きに滑っている」で 32 人（16.2%）だった。「走って降りる」は 13 人（6.6%）、「遊んでいるそばで遊ぶ」は 10 人（5.1%）だった。以上の 4 項目で全体の 50.0% 以上を占めている。

なお、図 4-4 中の「以外」は、人数の少なかった項目とその他を加えたものである。（本章、以下同じ）

「その他」は 23 人、11.6% となっており、主なものとしては以下のとおりである。（ ）は人数。

- ・はしごを逆に降りる（4） ・棒を振り回しながら滑る（1）
- ・階段から飛び降りる（2） ・腹ばいになって滑る（1）
- ・あぐらをかいて滑る（1） ・天板の上でふざける（2）
- ・頭から滑る（3） ・周りを見ずに滑る（1）
- ・下に人がいるのに滑る（1） ・登り降りを繰り返す（1）
- ・手を離しながら登る（5）
- ・すべり面のふちに足を乗せる（1）

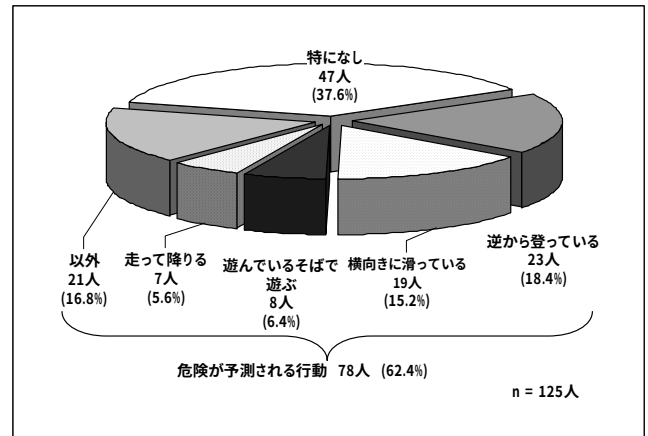


【図 4-4 すべり台の利用状況】

各年代別のすべり台の利用状況は、以下のとおりである。

(1) 0～5 歳

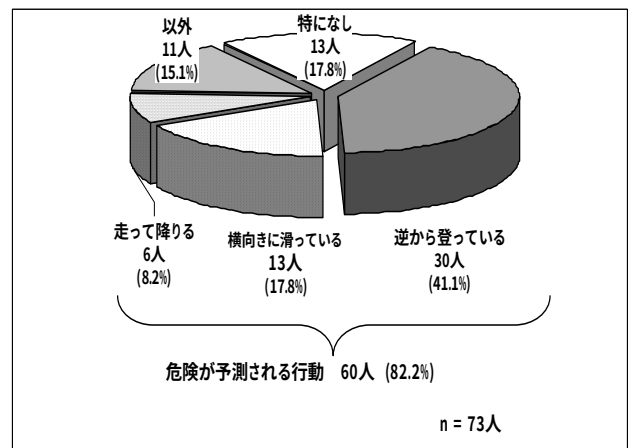
利用者 125 人のうち、何らかの危険が予測される行動がみられたのは 78 人、62.4% であった。最も多くみられた行動は、「逆から登っている」で 23 人（18.4%）。次に多かったものとして「横向きに滑っている」が 19 人（15.2%）で、他に「走って降りる」や「遊んでいるそばで遊ぶ」などの行動が多くみられた。



【図 4-5 すべり台の利用状況（0～5歳）】

(2) 6～12 歳

利用者 73 人のうち、何らかの危険が予測される行動がみられたのは 60 人、82.2% であった。最も多くみられた行動は「逆から登っている」で 30 人（41.1%）。次に「横向きに滑っている」が 13 人（17.8%）、「走って降りる」が 6 人（8.2%）となっている。



【図 4-6 すべり台の利用状況（6～12歳）】

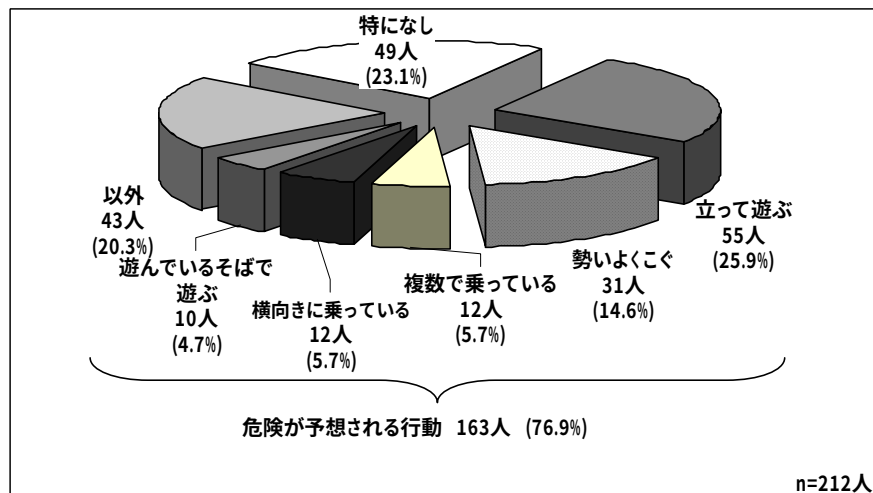
2 ぶらんこ

【表 4-3 推定年齢別行動類型】

複数該当有り

行動項目	推定年齢	0～5歳	6～12歳	合 計			
		項目別%	項目別%	項目別%			
飛び降りる・飛び乗る							
乗っている子の背中を勢いよく押す	2	1.3%	1	1.6%	2	1.4%	
片足で乗っている	2	1.3%			2	0.9%	
はりにぶら下がっている							
複数で乗っている	3	2.0%	9	14.3%	12	5.7%	
勢いよくこぐ	17	11.4%	14	22.2%	31	14.6%	
立って遊ぶ	36	24.2%	19	30.2%	55	25.9%	
遊んでいるそばで遊ぶ	7	4.7%	3	4.8%	10	2.4%	
横向きに乗っている	10	6.7%	2	3.2%	12	5.7%	
手を離す	2	1.3%	3	4.8%	5	2.4%	
その他	25	16.8%	8	12.7%	33	15.6%	
危険が予測される行動の合計		104	69.8%	59	93.7%	163	76.9%
特になし		45	30.2%	4	6.3%	49	23.1%
全 体		149	70.3%	63	29.7%	212	100.0%
年 齢 別 %							

ぶらんこでは、上記の12項目の行動について調査を行い、調査総数は212人（延べ人数）である。危険の予測される行動がみられたのは163人で、全体の76.9%を占め、その中で最も多くみられた行動は「立って遊ぶ」である。当該行動は55人（25.9%）で、一人で乗ることのできる年齢になると増えることがわかる。次は「勢いよくこぐ」で31人（14.6%）となっており、「複数で乗っている」、「横向きに乗っている」が各12人で5.7%となっている。また、「遊んでいるそばで遊ぶ」が4.7%を占めている。



【図 4-7 ぶらんこの利用状況】

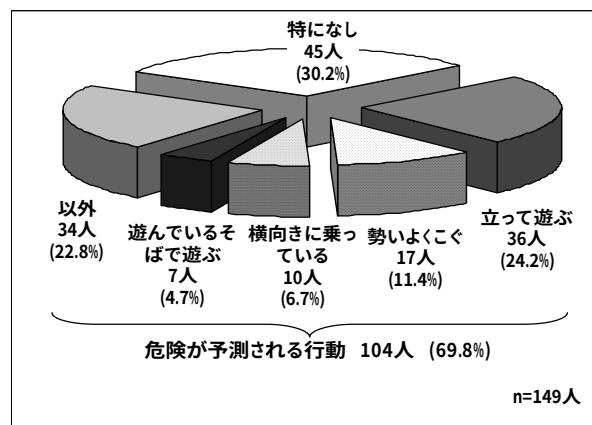
「その他」の行動は33人(15.6%)となっており、内容は以下のとおりである。
()は人数。

- ・お腹で乗り、鎖をねじる(3)
- ・一緒に乗る(親と)(3)
- ・横に揺らす、漕ぐ(4)
- ・外の柵に座って遊ぶ(3)
- ・正座をして乗る(2)
- ・ばたばた足を動かす(1)
- ・親に背中を勢いよく押される(7)
- ・ゲームをしながら(1)
- ・腹ばいで乗る(2)
- ・ねじって遊ぶ(1)
- ・携帯をいじりながら乗る(1)
- ・荷物を持って乗る(1)
- ・二人で立ち乗り(2)
- ・のけぞる(2)

各年代別のぶらんこの利用状況は、以下のとおりである。

(1) 0～5歳

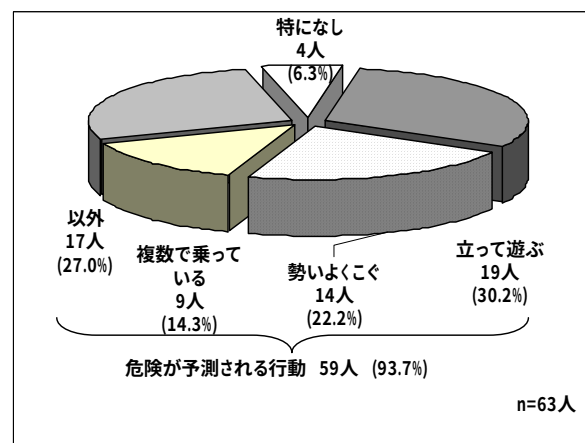
利用者149人のうち、何らかの危険が予測される行動がみられたのは、104人、69.8%であった。特に多かった行動は「立って遊ぶ」が36人(24.2%)、「勢いよくこぐ」が17人(11.4%)、「横向きに乘っている」が10人(6.7%)となっている。同じ子供が複数の行動をとる様子もみられた。



【図4-8 ぶらんこの利用状況(0～5歳)】

(2) 6～12歳

利用者63人のうち、何らかの危険が予測される行動がみられたのは、59人、93.8%であった。特に多かった行動は「立って遊ぶ」の19人(30.2%)、次が「勢いよくこぐ」が14人(22.2%)となっている。この2項目が多い傾向は、0～5歳にみられる行動と同じである。



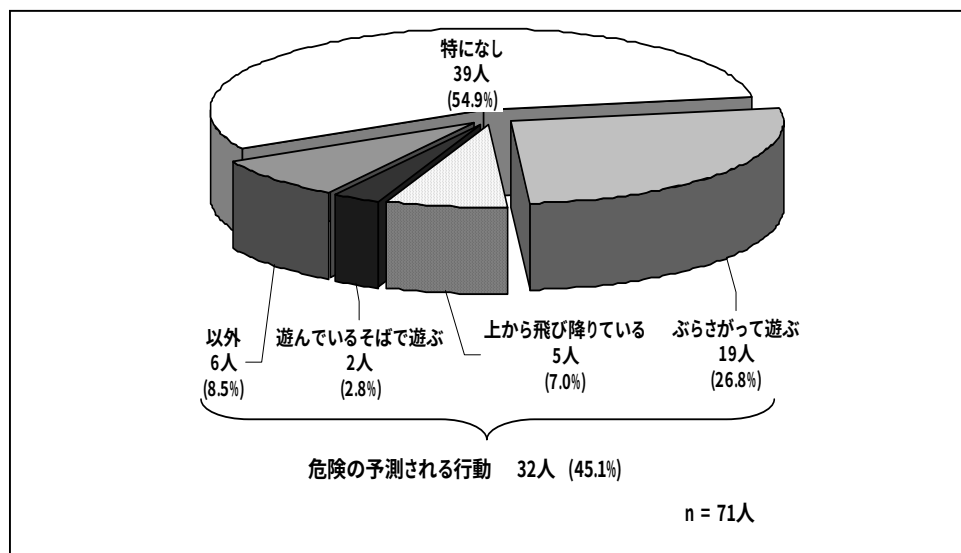
【図4-9 ぶらんこの利用状況(6～12歳)】

3 ジャングルジム

【表 4-4 推定年齢別行動類型】

複数該当有り

上に立って、手を離して遊んでいる	1		1
	1.6%		1.4%
上から物を投げる			
途中の横棒に座って遊んでいる			
ぶらさがって遊んでいる	16	3	19
	26.2%	30.0%	26.8%
上から飛び降りる	4	1	5
	6.6%	10.0%	7.0%
遊んでいるそばで遊ぶ	2		2
	3.3%		2.8%
その他	5		5
	8.2%		7.0%
危険が予測される行動の合計	28	4	32
	45.9%	40.0%	45.1%
特になし	33	6	39
	54.1%	60.0%	54.9%
全 体	61	10	71
年 齢 別 %	85.9%	14.1%	100.0%



【図 4-10 ジャングルジムの利用状況】

ジャングルジムでの行動は上記の表 4-4 のとおりである。8 項目について調査を行い、調査総数は 71 人となった。危険の予測される行動がみられたのは 32 人、45.1%であった。そのうち、最も多かった行動は「ぶらさがって遊ぶ」の 19 人 (26.8%)である。次に「上から飛び降りている」と「その他」が各 5 人で 7.0%となっている。

「その他」でみられた行動は以下のとおりである。()は人数。

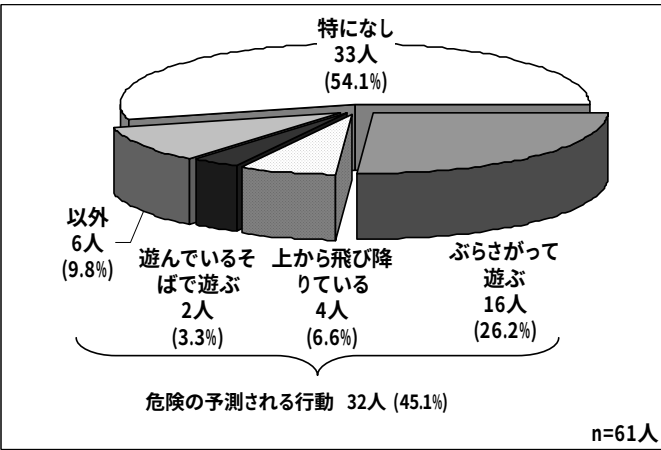
- ・寄りかかって遊ぶ(1) ・途中の横棒にしがみつく(1) ・途中で降りる(1)
- ・踏み外す(1) ・じゃんけんをしながら遊ぶ(1)

反対に該当のなかった項目は、「上から物を投げる」、「途中の横棒に座って遊んでいる」の 2 つであった。

各年代別のジャングルジムの利用状況は、以下のとおりである。

(1) 0～5歳

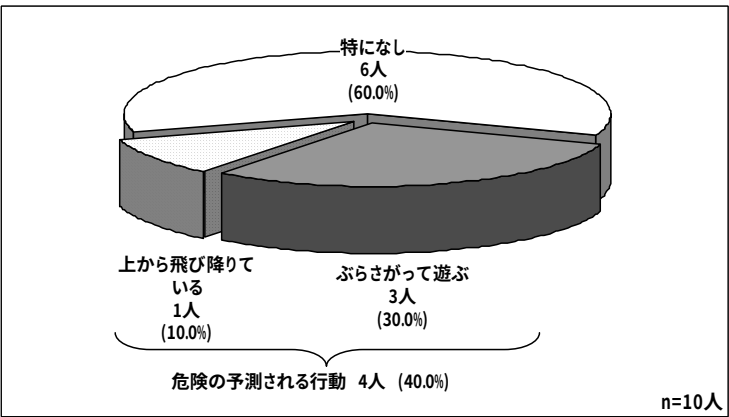
利用者は61人で、ジャングルジム利用者の85.9%を占める。この61人のうち、危険の予測される行動がみられたのは28人、45.9%となっている。特に多かった行動は、「ぶらさがって遊ぶ」の16人(26.2%)で、他に「上から飛び降りている」「遊んでいるそばで遊ぶ」などの行動がみられた。



【図 4-11 ジャングルジムの利用状況(0～5歳)】

(2) 6～12歳

利用者は10人で、そのうち危険の予測される行動がみられたのは4人(40.0%)だった。その行動としては「ぶらさがって遊ぶ」が3人(30.0%)、「上から飛び降りている」が1人(10.0%)となっている。



【図 4-12 ジャングルジムの利用状況(6～12歳)】

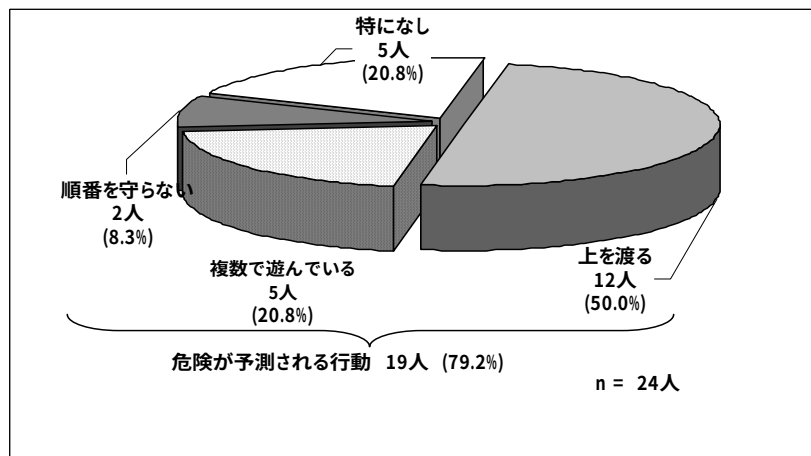
4 雲梯

【表 4-5 推定年齢別行動類型】

複数該当有り

飛び降りる・飛び乗る			
上に立っている			
両手を離す			
上を渡る	6 35.3%	6 85.7%	12 50.0%
複数で遊んでいる	5 29.4%		5 20.8%
遊んでいるそばで遊ぶ			
順番を守らない	2 11.8%		2 8.4%
その他			
危険が予測される行動の合計	13 76.5%	6 85.7%	19 79.2%
特になし	4 23.5%	1 14.3%	5 20.8%
全 体	17 70.8%	7 29.2%	24 100.0%
年 齢 別 %			

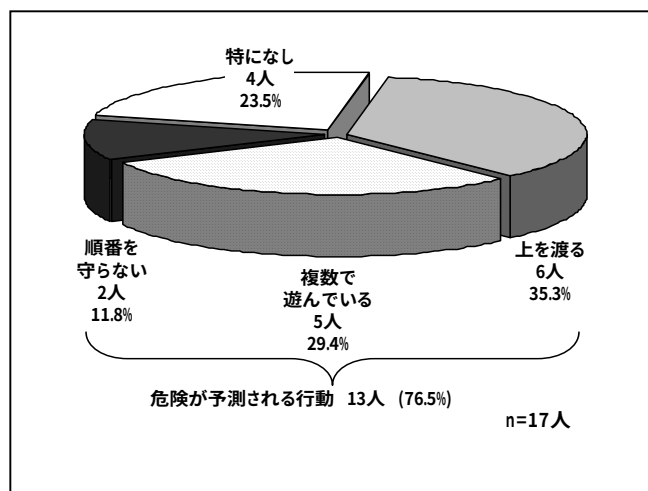
雲梯は、3日間の調査の中で24人しか利用せず、最も利用人数が少ない遊具であった。9項目で調査を実施したが、最も多くみられた行動は「上を渡る」の12人で、調査数全体の半数を占めた。次は、「特になし（特に危険がなかった）」と「複数で遊んでいる」が各5人ずつで、20.8%となっており、「順番を守らない」は2人（8.4%）だった。また、「飛び降りる・飛び乗る」、「上に立っている」、「両手を離す」、「遊んでいるそばで遊ぶ」といった行動はみられなかった。この中で、危険が予測される行動は19人、79.2%と高い割合を占めた。



【図 4-13 雲梯の利用状況】

(1) 0～5歳

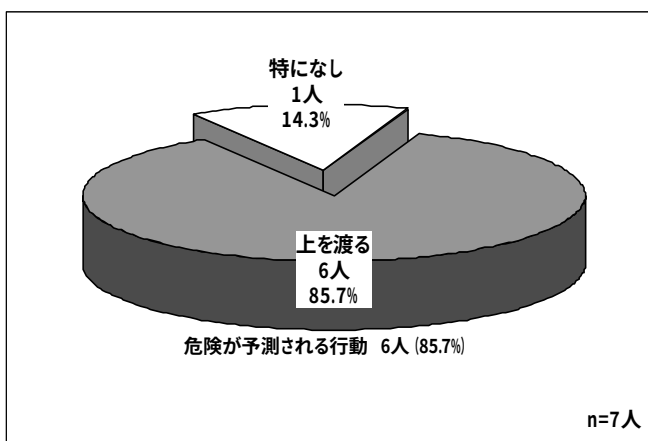
利用者は17人で、雲梯利用者の70.8%を占める。そのうち、危険の予測される行動は13人、76.5%でみられた。特に多かった行動は「上を渡る」が6人（35.3%）、「複数で遊んでいる」が5人（29.4%）であった。他に「順番を守らない」といった行動もみられた。



【図 4-14 雲梯の利用状況（0～5歳）】

(2) 6～12歳

利用者は7人と少なかったが、危険の予測される行動は6人で、85.7%と高い割合を占めた。この行動は「上を渡る」である。



【図 4-15 雲梯の利用状況（6～12歳）】

5 その他

鉄棒については、事故の多い遊具ではあるが、今回の実態調査の中では3日間のうち、わずか2人と利用者が少なく、また危険の予測される行動等もみられなかったことから、今回の実態調査内容には含めないこととする。

第3 保護者の動向

子供が遊んでいるときに、保護者はどうしているのか、保護者の動向について、次の5項目について調査を行い、全調査数は487人（延べ人数）となり、年齢別では、0～5歳が369人（75.8%）、6～12歳が118人（24.4%）となった。

【表 4-6 保護者の動向】

複数該当有り

行動項目		推定年齢		0～5歳		6～12歳		合 計	
		項目別%		項目別%		項目別%			
保護者は付き添っていない		35		90		125			
		9.5%		76.3%		25.7%			
保護者が付き添っている	保護者は、子供に手の届くところにいる（遊具の傍らにいる）	334 90.5%	180	28 23.7%	14	362 74.3%	194		
			48.8%		11.9%		39.9%		
	保護者は、子供の動きが見える離れた所にいる		85		11		96		
			23.0%		9.3%		19.7%		
	保護者は、子供の声は聞こえるが、動きが見えない所にいる		8				8		
2.2%			1.6%						
保護者は、携帯電話で話す・保護者同士で話す・本を読んでいるなど、子供の動きを見守っていない	61	3	64						
	16.5%	2.5%	13.1%						
全 体		369		118		487			
年齢別%		75.8%		24.2%		100.0%			

表 4-6 は、子供が遊んでいるときの保護者の動向を表したものである。「保護者は付き添っていない」以外の行動項目は、付き添っているときの項目である。「保護者が付き添っている」の人数はその合計である。

1 「保護者が付き添っていない」

0～5歳が35人（9.5%）、6～12歳が90人（76.3%）であり、「保護者が付き添っている」は、0～5歳が334人（90.5%）、6～12歳が28人（23.7%）である。このことから、年齢が低いほど保護者が一緒に付き添っている割合が高いといえる。

2 以下に「保護者が付き添っている」各項目の傾向をみていく。

2 「保護者は、子供に手の届く所にいる（遊具の傍らにいる）」

0～5歳が180人（48.8%）、6～12歳が14人（11.9%）で、年齢が低いほど保護者は子供とともに行動している割合が高いといえる。

3 「保護者は、子供の動きが見える離れた場所にいる」

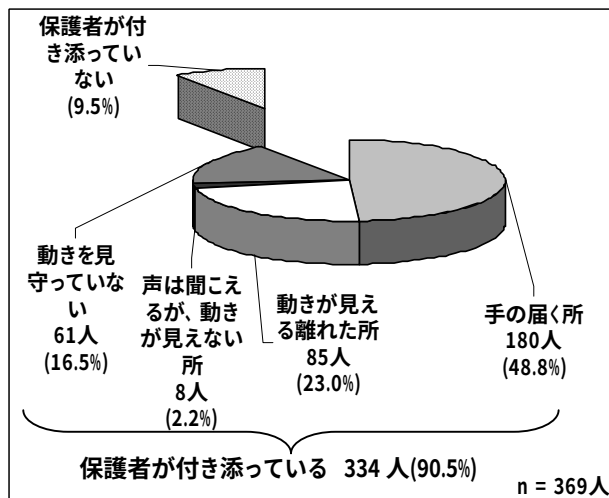
0～5歳が85人（23.0%）、6～12歳が11人（9.3%）である。

4 「保護者は、子供の声は聞こえるが、動きが見えない所にいる」

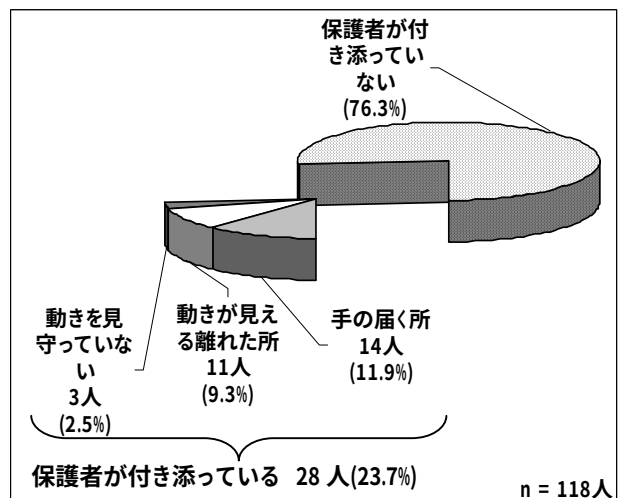
子供が保護者から死角に入っている状態である。このような状況下では、事故が起こりそうな場合や起こった場合の対応がすばやく行えない可能性がある。0～5歳が8人（2.2%）であり、6～12歳の保護者にはみられなかった。

5 「保護者は、携帯電話で話す・保護者同士で話す・本を読んでいるなど、子供の動きを見守っていない」

0～5歳が61人（16.5%）、6～12歳が3人（2.5%）である。保護者同士のグループや幼稚園帰りの子供たちの保護者は、子供の動きが見える位置や手の届く位置等比較的近くにいるが、話に夢中になっていたり、本を読んでいた顔や顔を挙げないなどの様子がみられた。



【図 4-16 保護者の付添状況：0～5歳】



【図 4-17 保護者の付添状況：6～12歳】

第4 遊具設置面の状況

公園内の遊具の設置状況について

遊具の設置面では以下の6項目について調査を行った。

1. 遊具の直下・周囲の地表面がアスファルト・コンクリートである。
2. 遊具の直下・周囲に樹木、花壇、排水溝、他の遊具等がある。
3. ガラスや金属片、ロープが落ちている。
4. 一部が壊れている、又は外されたまま放置されている。
5. 塗装が剥げている、又は錆びている。
6. 支柱のコンクリート基礎部が露出している。

今回の実態調査では3箇所のみ調査なので、公園全体の状況とは言い切れない。今回の3箇所の公園をA、B、Cとすると、上記6項目について、2箇所はいずれも該当がなく、1箇所についてはぶらんこの支柱のコンクリート基礎部がわずかに露出していた。以下、各公園の状況について記す。

A公園；すべて設置面は土。

他の遊具等との接近はない。

B公園；すべて設置面は土で、上にウッドチップが敷かれている。

他の遊具等との接近はない。

C公園；すべて設置面は土で、上に砂が敷かれている。

他の遊具等との接近はない。

第5章 保護者等の意識調査

第1 保護者の意識調査結果の基本データ

保護者の意識調査の各質問項目に対する回答結果については、以下のとおりである。

1 子供が遭遇した事故

30代・40代を中心とする663人の保護者からの回答があるが、質問により回答がなかったものや複数回答可のものがあるため、回答の合計は一定とはならない。

(1) 子供が事故にあったことがあるかについて

保護者が子供の事故を知っているのは、222人、33.5%である。

【表5-1】

	20代	%	30代	%	40代	%	50代	%	その他	不明	合計	%
はい	13	44.8%	117	37.4%	83	28.1%	4	36.4%	3	2	222	33.5%
いいえ	16	55.2%	196	62.6%	212	71.9%	7	63.6%	3	7	441	66.5%
合計	29	100.0%	313	100.0%	295	100.0%	11	100.0%	6	9	663	100.0%
%	4.4%		47.2%		44.5%		1.7%		0.9%	1.4%	100.0%	

(2) 事故にあった場所について

全体では、高い割合の順から、自宅（28.0%）、道路（25.1%）、幼稚園・保育園・小学校（17.0%）である。

自宅は、0～5歳が6～12歳より32.1ポイント高く、道路は6～12歳が0～5歳より16.8ポイント高い。

【表5-2】

	0～5歳	%	6～12歳	%	合計	%
自宅	68	40.0%	8	7.9%	76	28.0%
公園・広場	24	14.1%	13	12.9%	37	13.7%
デパート・スーパー等	4	2.4%			4	1.5%
道路	32	18.8%	36	35.6%	68	25.1%
駅	1	0.6%	3	3.0%	4	1.5%
幼稚園・保育園・小学校	17	10.0%	29	28.7%	46	17.0%
その他	24	14.1%	12	11.9%	36	13.3%
合計	170	100.0%	101	100.0%	271	100.0%

(3) 受傷形態について

全体では、高い割合の順から、転倒・転落（48.9%）、衝突（21.0%）である。

0～5歳では転倒・転落（85人、50.0%）、衝突（23人、13.5%）、誤飲（20人、11.8%）が多く、6～12歳では転倒・転落（48人、47.1%）、衝突（34人、33.3%）が多く、それぞれに特徴的な受傷形態である。

【表5-3】

	0～5歳	%	6～12歳	%	合計	%
転倒・転落	85	50.0%	48	47.1%	133	48.9%
挟まれ	15	8.8%	4	3.9%	19	7.0%
衝突	23	13.5%	34	33.3%	57	21.0%
誤飲	20	11.8%	1	1.0%	21	7.7%
その他	26	15.3%	12	11.8%	38	14.0%
不明	1	0.6%	3	2.9%	4	1.5%
合計	170	100.0%	102	100.0%	272	100.0%

(4) 誤飲について

ア 誤飲したものについて

0～5歳は、タバコ、薬を合わせると35.0%となる。

【表5-3-1】

	0～5歳	%	6～12歳	%	合計	%
タバコ	4	20.0%			4	19.0%
おもちゃ	3	15.0%			3	14.3%
洗剤						
薬	3	15.0%	1	100.0%	4	19.0%
その他	10	50.0%			10	47.6%
合計	20	100.0%	1	100.0%	21	100.0%

イ 誤飲したものの置き場所について

誤飲したものの9割以上が子供の手の届く所に置いている。

【表5-3-2】

	0～5歳	%	6～12歳	%	合計	%
子供の手の届く所	18	90.0%	1	100.0%	19	90.5%
子供の手の届かない所	2	10.0%			2	9.5%
合計	20	100.0%	1	100.0%	21	100.0%

(5) 何をしているときに事故にあったかについて

全体では、高い割合の順から、遊び（37.3%）、歩行（19.9%）、自転車運転及び自転車にさせられて（16.6%）である。

0～5歳では、遊び（70人、41.2%）、歩行（31人、18.2%）、自転車にさせられて（16人、9.4%）が多く、6～12歳では、遊び（31人、30.7%）、歩行（23人、22.8%）、自転車運転（20人、19.8%）、授業・保育中（13人、12.9%）が多く見られ、それぞれ特徴的な項目である。

【表5-4】

	0～5歳	%	6～12歳	%	合計	%
歩行	31	18.2%	23	22.8%	54	19.9%
遊び	70	41.2%	31	30.7%	101	37.3%
運動中	1	0.6%	2	2.0%	3	1.1%
食事中	6	3.5%	2	2.0%	8	3.0%
自転車運転	8	4.7%	20	19.8%	28	10.3%
自転車にさせられて	16	9.4%	1	1.0%	17	6.3%
授業・保育中	7	4.1%	13	12.9%	20	7.4%
自動車・バスに乗車	3	1.8%	2	2.0%	5	1.8%
親の買い物中	1	0.6%	1	1.0%	2	0.7%
その他	24	14.1%	5	5.0%	29	10.7%
不明	3	1.8%	1	1.0%	4	1.5%
合計	170	100.0%	101	100.0%	271	100.0%

16.6%

(6) 関連器物について

全体では、高い割合の順から、自転車及び自転車の補助イス（14.9%）、家具、学校等の机・イス・棚など（12.4%）、遊具（10.5%）である。

0～5歳では、家具、学校等の机・イス・棚など（29人、16.9%）、遊具（17人、9.9%）、階段（15人、8.7%）が多く、6～12歳では、自転車（15人、14.6%）、自動車（13人、12.6%）、遊具（12人、11.7%）が多く見られ、それぞれ特徴的な関連器物である。

【表5-5】

	0～5歳	%	6～12歳	%	合計	%
家具、学校等の机・イス・棚など	29	16.9%	5	4.9%	34	12.4%
階段	15	8.7%	3	2.9%	18	6.5%
廊下	2	1.2%	5	4.9%	7	2.5%
ベランダ						
窓・サッシ	5	2.9%			5	1.8%
手動ドア	4	2.3%	3	2.9%	7	2.5%
自動ドア	2	1.2%			2	0.7%
電車のドア	1	0.6%			1	0.4%
自動車	6	3.5%	13	12.6%	19	6.9%
エレベーターのドア	1	0.6%			1	0.4%
エスカレーター			1	1.0%	1	0.4%
自転車	23	13.4%	15	14.6%	38	13.8%
自転車の補助イス	3	1.7%			3	1.1%
樹木	3	1.7%	3	2.9%	6	2.2%
遊具	17	9.9%	12	11.7%	29	10.5%
おもちゃ	8	4.7%			8	2.9%
その他	43	25.0%	39	37.9%	82	29.8%
不明	10	5.8%	4	3.9%	14	5.1%
合計	172	100.0%	103	100.0%	275	100.0%

14.9%

(7) 受傷部位について

全体では、高い割合の順から、頭・顔（47.5%）、足（18.3%）、腕及び手（14.1%）である。

0～5歳は、頭・顔（92人、53.5%）、6～12歳は、頭・顔（43人、38.4%）、足（36人、32.1%）がそれぞれ特徴的である。

【表5-6】

	0～5歳	%	6～12歳	%	合計	%
頭・顔	92	53.5%	43	38.4%	135	47.5%
腕	5	2.9%	12	10.7%	17	6.0%
手	17	9.9%	6	5.4%	23	8.1%
胸部	3	1.7%	1	0.9%	4	1.4%
腹部	1	0.6%	3	2.7%	4	1.4%
背中	1	0.6%	2	1.8%	3	1.1%
足	16	9.3%	36	32.1%	52	18.3%
その他	28	16.3%	5	4.5%	33	11.6%
不明	9	5.2%	4	3.6%	13	4.6%
合計	172	100.0%	112	100.0%	284	100.0%

14.1%

(8) 事故にあった時の保護者等の行動について

全体では、高い割合の順から、応急処置（37.6%）、病院に連絡（32.9%）、119番通報（9.9%）である。

応急処置、119番通報、病院に連絡で80.4%を占め、何もしない保護者等は1割に満たない。

【表5-7】

	0～5歳	%	6～12歳	%	合計	%
応急処置	79	38.9%	42	35.3%	121	37.6%
119番通報	20	9.9%	12	10.1%	32	9.9%
病院に連絡	67	33.0%	39	32.8%	106	32.9%
何もしない	16	7.9%	6	5.0%	22	6.8%
その他	17	8.4%	18	15.1%	35	10.9%
不明	4	2.0%	2	1.7%	6	1.9%
合計	203	100.0%	119	100.0%	322	100.0%

80.4%

(9) ケガの程度について

全体では、高い割合の順から、通院（61.6%）、病院には行かなかった（31.4%）である。

病院には行かなかったは、0～5歳が6～12歳より9.0ポイント高く、入院・通院を合わせたものは、6～12歳（73.2%）が0～5歳（61.8%）より11.4ポイント高い。

【表5-8】

	0～5歳	%	6～12歳	%	合計	%
病院には行かなかった	59	34.7%	26	25.7%	85	31.4%
通院	101	59.4%	66	65.3%	167	61.6%
入院	4	2.4%	8	7.9%	12	4.4%
不明	6	3.5%	2	2.0%	8	3.0%
合計	170	100.0%	101	100.0%	271	100.0%

(10) 事故にあったときの保護者の見守りについて

全体では、高い割合の順から、子供が見えるところにいなかった（50.9%）、子供が見えるところにいた（46.1%）である。

子供が見えるところにいたは、0～5歳が60.0%で、6～12歳より37.2ポイント高く、子供が見えるところにいなかったは、6～12歳が0～5歳より35.7ポイント高い。

【表5-9】

	0～5歳	%	6～12歳	%	合計	%
子供が見えるところにいた	102	60.0%	23	22.8%	125	46.1%
子供が見えるところにいなかった	64	37.6%	74	73.3%	138	50.9%
おぼえていない・わからない	2	1.2%			2	0.7%
不明	2	1.2%	4	4.0%	6	2.2%
合計	170	100.0%	101	100.0%	271	100.0%

(1) 事故の責任の所在について

全体では、高い割合の順から、保護者（44.5%）、本人（35.0%）である。

保護者は、0～5歳が6～12歳より46.3ポイント高い。本人、幼稚園・保育園・学校は、6～12歳が0～5歳より、それぞれ26.5ポイント、5.7ポイント高い。

【表5-10】

	0～5歳	%	6～12歳	%	合計	%
本人	52	24.6%	69	51.1%	121	35.0%
保護者	132	62.6%	22	16.3%	154	44.5%
製品等の製造者	3	1.4%	1	0.7%	4	1.2%
幼稚園・保育園・学校	10	4.7%	14	10.4%	24	6.9%
行政	1	0.5%	3	2.2%	4	1.2%
公園・遊び場、建物等の管理者	9	4.3%	6	4.4%	15	4.3%
その他	2	0.9%	14	10.4%	16	4.6%
不明	2	0.9%	6	4.4%	8	2.3%
合計	211	100.0%	135	100.0%	346	100.0%

2 事故には至らなかったヒヤリ・ハット事案

30代・40代を中心とする663人の保護者からのヒヤリ・ハット事案の回答があるが、質問により回答がなかったものや複数回答可のものがあるため、回答の合計は一定とはならない。

(1) 子供のヒヤッとした・ハッとした危険を感じた経験について

保護者が子供のヒヤッとした・ハッとした危険を感じたのは、363人、54.8%である。

【表5-11】

	20代	30代	40代	50代	その他	不明	合計	%
感じたことがある	19	192	146	1	2	3	363	54.8%
感じたことがない	10	121	149	10	4	6	300	45.2%
合計	29	313	295	11	6	9	663	100.0%

(2) 事故にあいそうになった場所について

全体では、高い割合の順から、道路（47.7%）、自宅（18.6%）、公園・広場（11.3%）、デパート・スーパー等（10.1%）である。

自宅、デパート・スーパー等は、0～5歳の方がそれぞれ17.4ポイント、12.1ポイント高く、道路は6～12歳の方が36.2ポイント高い。

【表5-12】

	0～5歳	%	6～12歳	%	合計	%
自宅	67	24.5%	10	7.1%	77	18.6%
公園・広場	34	12.4%	13	9.2%	47	11.3%
デパート・スーパー等	39	14.2%	3	2.1%	42	10.1%
道路	97	35.4%	101	71.6%	198	47.7%
駅	7	2.6%	4	2.8%	11	2.7%
幼稚園・保育園・小学校	4	1.5%	4	2.8%	8	1.9%
その他	24	8.8%	6	4.3%	30	7.2%
不明	2	0.7%			2	0.5%
合計	274	100.0%	141	100.0%	415	100.0%

(3) どのような事故にあいそうになったのかについて

全体では、高い割合の順から、衝突 (40.4%)、転倒・転落 (37.3%)、挟まれ (9.7%) である。

転倒・転落、挟まれば、0～5歳が6～12歳よりそれぞれ14.6ポイント、5.0ポイント高く、衝突は6～12歳が0～5歳より29.1ポイント高い。

誤飲 (15人、5.5%) は、0～5歳に特徴的なものである。

【表5-13】

	0～5歳	%	6～12歳	%	合計	%
転倒・転落	115	42.3%	39	27.7%	154	37.3%
挟まれ	31	11.4%	9	6.4%	40	9.7%
衝突	83	30.5%	84	59.6%	167	40.4%
誤飲	15	5.5%			15	3.6%
その他	24	8.8%	9	6.4%	33	8.0%
不明	4	1.5%			4	1.0%
合計	272	100.0%	141	100.0%	413	100.0%

(4) 何をしている時に事故にあいそうになったかについて

全体では、高い割合の順から、自転車運転及び自転車にさせられて (31.2%)、遊び (26.2%)、歩行 (24.5%) である。

0～5歳では、遊び (84人、30.9%)、歩行 (72人、26.5%)、自転車にさせられて (31人、11.4%)、自転車運転 (29人、10.7%) が多く、6～12歳では、自転車運転 (68人、48.2%)、歩行 (29人、20.6%)、遊び (24人、17.0%) が多く見られ、それぞれに特徴的な項目である。

【表5-14】

	0～5歳	%	6～12歳	%	合計	%
歩行	72	26.5%	29	20.6%	101	24.5%
遊び	84	30.9%	24	17.0%	108	26.2%
運動中			1	0.7%	1	0.2%
食事中	8	2.9%	1	0.7%	9	2.2%
自転車運転	29	10.7%	68	48.2%	97	23.5%
自転車にさせられて	31	11.4%	1	0.7%	32	7.7%
授業・保育中			1	0.7%	1	0.2%
自動車・バスに乗車	3	1.1%	3	2.1%	6	1.5%
親の買い物中	16	5.9%	3	2.1%	19	4.6%
その他	26	9.6%	7	5.0%	33	8.0%
不明	3	1.1%	3	2.1%	6	1.5%
合計	272	100.0%	141	100.0%	413	100.0%

31.2%

(5) 関連器物について

全体では、高い割合の順から、自動車（26.1%）、自転車及び自転車の補助イス（21.9%）、遊具（6.8%）である。

0～5歳では、自動車（53人、19.0%）、自転車（40人、14.3%）、遊具（23人、8.2%）が多く見られる、他に特徴的なものとして自転車の補助イス（11人、3.9%）が挙げられる。6～12歳では、自動車（58人、39.7%）、自転車（42人、28.8%）が多く見られる。自動車、自転車は0～5歳、6～12歳ともに割合が高い関連器物である。

【表5-15】

	0～5歳	%	6～12歳	%	合計	%
家具、学校等の机・イス・棚など	14	5.0%	4	2.7%	18	4.2%
階段	18	6.5%	3	2.1%	21	4.9%
廊下	1	0.4%	3	2.1%	4	0.9%
ベランダ	3	1.1%	1	0.7%	4	0.9%
窓・サッシ	4	1.4%			4	0.9%
手動ドア	8	2.9%	2	1.4%	10	2.4%
自動ドア	8	2.9%	2	1.4%	10	2.4%
電車のドア	3	1.1%	2	1.4%	5	1.2%
自動車	53	19.0%	58	39.7%	111	26.1%
エレベーターのドア	11	3.9%			11	2.6%
エスカレーター	18	6.5%	2	1.4%	20	4.7%
自転車	40	14.3%	42	28.8%	82	19.3%
自転車の補助イス	11	3.9%			11	2.6%
樹木	1	0.4%			1	0.2%
遊具	23	8.2%	6	4.1%	29	6.8%
おもちゃ	8	2.9%			8	1.9%
その他	45	16.1%	18	12.3%	63	14.8%
不明	10	3.6%	3	2.1%	13	3.1%
合計	279	100.0%	146	100.0%	425	100.0%

21.9%

3 子供に対する気配り等

保護者663人の子供に対する気配り等は、以下のとおりである。

(1) 普段、子供がどこでどんな遊びをしているか知っているかについて

全年代では、高い割合の順から、知っている（91.7%）、知らない（6.8%）である。

保護者が子供の事故を知っている中で、20代は86.2%と他の年代に比べ割合が高い。

【表5-16】

	20代	%	30代	%	40代	%	50代	%	その他	不明	合計	%
知っている	25	86.2%	295	94.2%	266	90.2%	9	81.8%	4	9	608	91.7%
知らない	4	13.8%	21	6.7%	19	6.4%	1	9.1%			45	6.8%
不明					10	3.4%	1	9.1%	2		13	2.0%
合計	29	100.0%	313	100.0%	295	100.0%	11	100.0%	6	9	663	100.0%

(2) 子供が遊んでいる時、事故にあわないように気を配っているか（子供への事故防止に対する配慮）について

全年代では、高い割合の順から、常に注意している（57.6%）、ときどき注意している（38.6%）、注意していない（2.1%）である。

【表5-17】

	20代	%	30代	%	40代	%	50代	%	その他	不明	合計	%
常に注意している	19	65.5%	200	63.9%	147	49.8%	6	54.5%	5	5	382	57.6%
ときどき注意している	9	31.0%	109	34.8%	130	44.1%	4	36.4%		4	256	38.6%
注意していない	1	3.4%	4	1.3%	9	3.1%					14	2.1%
不明					9	3.1%	1	9.1%	1		11	1.7%
合計	29	100.0%	313	100.0%	295	100.0%	11	100.0%	6	9	663	100.0%

4 事故防止に関する保護者の意識

保護者663人の事故防止に関する保護者の意識は、以下のとおりである。

- (1) 事故が起こりやすい公園の遊具は取り除き、設置すべきではないかについて
全年代では、はい (35.0%)、いいえ (20.8%)、どちらとも言えない (42.4%) である。

【表5-18-1】

	20代	%	30代	%	40代	%	50代	%	その他	不 明	合計	%
はい	9	31.0%	110	35.1%	106	35.9%	4	36.4%	1	2	232	35.0%
いいえ	8	27.6%	54	17.3%	66	22.4%	2	18.2%	3	5	138	20.8%
どちらとも言えない	12	41.4%	147	47.0%	114	38.6%	5	45.5%	2	1	281	42.4%
不明			2	0.6%	9	3.1%		0.0%		1	12	1.8%
合計	29	100.0%	313	100.0%	295	100.0%	11	100.0%	6	9	663	100.0%

- (2) 駅、デパート、スーパー等での事故防止について、法律で定めるべきであるかについて
全年代では、はい (43.9%)、いいえ (10.0%)、どちらとも言えない (44.0%) である。

【表5-18-2】

	20代	%	30代	%	40代	%	50代	%	その他	不 明	合計	%
はい	13	44.8%	145	46.3%	120	40.7%	7	63.6%	4	2	291	43.9%
いいえ	4	13.8%	33	10.5%	28	9.5%				1	66	10.0%
どちらとも言えない	12	41.4%	130	41.5%	139	47.1%	4	36.4%	2	5	292	44.0%
不明			5	1.6%	8	2.7%				1	14	2.1%
合計	29	100.0%	313	100.0%	295	100.0%	11	100.0%	6	9	663	100.0%

- (3) 軽度な事故は、その後の安全な行動をするうえで良い経験であるかについて
全年代では、はい (50.7%)、いいえ (13.0%)、どちらとも言えない (33.6%) である。

【表5-18-3】

	20代	%	30代	%	40代	%	50代	%	その他	不 明	合計	%
はい	14	48.3%	176	56.2%	137	46.4%	4	36.4%	2	3	336	50.7%
いいえ	4	13.8%	38	12.1%	38	12.9%	1		2	3	86	13.0%
どちらとも言えない	11	37.9%	94	30.0%	110	37.3%	5	45.5%	1	2	223	33.6%
不明			5	1.6%	10	3.4%	1		1	1	18	2.7%
合計	29	100.0%	313	100.0%	295	100.0%	11	100.0%	6	9	663	100.0%

- (4) 保護者・大人が、子供の事故の様子、事故を防ぐことが大事であること（事故に至る過程）を理解するようになれば、子供の大きな事故は少なくできるかについて

全年代では、はい (77.8%)、いいえ (1.8%)、どちらとも言えない (18.3%) である。

なお、はいと答えたのは年代が上がるにつれて割合が減少し、どちらとも言えないと答えたのは、年代が上がるにつれて割合が増加している。

【表5-18-4】

	20代	%	30代	%	40代	%	50代	%	その他	不 明	合計	%
はい	25	86.2%	248	79.2%	226	76.6%	5	45.5%	5	7	516	77.8%
いいえ	1	3.4%	7	2.2%	4	1.4%					12	1.8%
どちらとも言えない	3	10.3%	56	17.9%	54	18.3%	6	54.5%	1	1	121	18.3%
不明			2	0.6%	11	3.7%				1	14	2.1%
合計	29	100.0%	313	100.0%	295	100.0%	11	100.0%	6	9	663	100.0%

5 行政や事業者などに対する要望

663人の保護者から挙げられた224件の要望を、以下のとおり分類し、主なものをここに転記する。

(1) 遊具に関して

- ア 定期的に公園・学校にある遊具を必ず点検して欲しい。されているかもしれませんが、私達には何ヶ月に1度されているかなど、知りませんので教えて下さい。(30代 女性)
- イ 重大事故の可能性のあるものは取り除くとは言っても、全て危ない危ないで、公園の遊具を幼児専用の様な幼稚なものばかりにされても困ります。基礎体力を鍛える事も日常の事故防止につながりますので。(40代 女性)
- ウ 遊具の設置や修理は、コスト面を優先するのではなく、安全面を第一に考えて欲しい。**子供達は沢山の可能性があるのだから**、安全面については、大人の考えでなく、子供の目線で考えて欲しい。(30代 女性)
- エ 明らかに危険である物は除き、遊びの中でも危険の有無を学ばせる事が大切であるので、その旨を明記の上、昔ながらの遊具を設置して欲しい。(40代 女性)
- オ 遊具をなくすより、注意事項を明記、自己(親の)責任の範囲で使用するようにして、遊具を設置して欲しい。(40代 女性)

(2) 行政・事業者に関して

- ア 事故が起きてから対策を取る、というパターンから脱し、日常生活の中から上がる声を充分生かすべき。(40代 女性)
- イ 安全な遊具を作ってほしい。(30代 女性)
- ウ 子供が車に脅かされず、のびやかに遊べる環境を望みます。体を動かした幼児期が、後の「大事故に遭わない」運動神経・自己判断を育てると思います。小学校のグラウンドは土が良いです。(30代 女性)
- エ 情報開示。迅速な対応(特殊事例とか被害者の過失で片付けない)
(30代 女性)
- オ 何でもすばやい情報が欲しい。(30代 女性)
- カ 今回のようなアンケートをして情報を集め、対応してもらいたい。
(40代 女性)
- キ 私は保育士ですが、公園の水のみ場など子供がすべってぶついたりしそうな所が多いです。他の遊具に関しても、設計する際、危険予知を誰が想定して決めているのか不信なことが多いと思う。(40代 女性)
- ク 親が常に事故に注意し、子供を見守ることは物理的に不可能なため、危険性のあるものについては、行政や事業者などにより積極的に事故防止策を考えていただきたく思います。(30代 女性)
- ケ 事故防止はとても大切なことですが、追求するあまり、何でも禁止、何でも撤去とならないことを祈ります。(40代 女性)
- コ 公園・道路などでも、日頃危険なことは多いが、聞いてくれる窓口がよくわからず、そのままにしてしまう事が多い。(40代 女性)

(3) 通学路・歩道等に関して

- ア 通学路に歩道のない所があります、大変危険です。通学路の整備を早急にお願いします。(30代 女性)
- イ 歩道や車道で駐輪・駐車のため、道が狭くなったり、見通しが悪くなっているので、どうかしてほしい。(40代 女性)
- ウ 道路(歩道)のタイル貼りや鉄板等、雨天の場合スリップして大変危険。自転車はもちろん、子供の普通の歩行でも転倒した。(30代 女性)
- エ 近所の道路が狭くて安全に歩行が出来ないにもかかわらず、車はすれすれにスピードを出して通り過ぎていくので、とても危険を感じる。歩行者にとって安全な道路を整備して欲しい。(30代 女性)
- オ ガードレールがない歩道が多いので、ガードレールを設置して欲しい。(30代 女性)
- カ 歩道でも、路地の所や車が出てくる所には、大きな字で「止まれ」など書いてくれたら、子供ももう少し注意するのでは……。 (30代 女性)

(4) 交通安全・防犯に関して

- ア 親として、子供の危険というと、交通事故や連れ去り、不審者などが一番不安です。警察もそうですが、町の防犯を高めなければならない状況にあると思います。(30代 女性)
- イ 我が家では、自転車によるヒヤッとする事が多く、学校でも年1回交通安全教室がありますが、もっと年1回でなく、教えるきっかけが欲しい。(30代 女性)
- ウ 道路で無断駐車が多すぎる。子供の目線には車ばかりで、歩道も危ない。(40代 女性)
- エ 子供の下校時や帰宅時(16時冬・18時夏)にパトカーで巡回して欲しい。(40代 女性)
- オ 事故防止は大切だが、不審者に対する取り締まり、パトロールを強化して欲しい。(30代 女性)

(5) 保護者に関して

- ア 子供は、5時になったら家に帰るように、親がしっかり教育した方が良いと思う。いつまでも遊んでいる子がいるから、事故にあうような気がします。(30代 女性)
- イ 一人一人の子供が自分の子供である、という目で見守る大人の優しさが必要。(30代 女性)
- ウ 事故の原因が子供にある場合、その場にいた保護者に責任を課すべきである。(30代 女性)
- エ 遊び方と年齢・能力を考え、保護者の監督が必要とあれば、必ず付き添えばよいのでは。一概にYES NOでは答えられない。(30代 女性)
- オ 他人の子供に対しても、無関心とならず、皆で協力、連絡しあう必要を痛感しています。(40代 女性)
- カ スーパーなどで、カートに子供を乗せて平気で買い物をしている親を見るが、子供がカートから足を出したりして、周りの人がその足につまずいたりするのを見かけたことがある。親を教育する場を設けたほうが良い。(30代 女性)

キ 自分の子供に責任を持っていない親も多い。他の大人が見ていてくれる等の甘えも見え、ストレス、忙しさ等から気持ちもわかるが、子供の安全・助けに責任を持つのは親の役目だと思う。ただし、母親一人の負担が大きすぎるのも事実です。地域の助けも欲しいです。(30代 女性)

ク 小さい時にきちんと親と遊んでいれば、そんなに事故は起こらないと思う。不審者などは地域全体で注意すべき。(40代 女性)

(6) 公園に関して

ア 昔のように親や近所の人が常時子供を見ている時間がないと思う。どんな小さな公園でも、巡視員がいて子供のアドバイスをしてくれる人がいると良いと思う。親も安心です。(30代 女性)

イ 公園がまったく安全な場所になっていません。地域で協力して子供が育つ社会にして欲しいと思います。(40代 女性)

ウ 子供達から遊ぶ場所があまりないので、もっと広くのびのび遊べる場所があれば良い。ボール遊びとかする所があまりない。(40代 女性)

エ 公園なども、なるべく見通しをよくし、近所の人々が行きかう場所として機能することを願います。(30代 女性)

(7) 学校に関して

ア 学校で事故があった時の学校の対応が不適切だったと思います、事故があったことは電話又は連絡帳で連絡すべきではないですか？本人の自己申告と、手・腕の腫れによりわかりました。全治3週間でした。教育従事者の認識が甘いのではないのでしょうか。多少の憤りを感じます。(40代 女性)

イ 小学校の全学年に人工呼吸の仕方などを、年1回以上教えて下さい。(30代 女性)

ウ 安全教室など学校や地域での開催。(40代 女性)

エ 事故の情報を起きた場所に貼り紙をする。幼稚園や保育園に事例のプリントを配るなどして、意識を高めると良いのではないのでしょうか。(40代 女性)

オ 幼稚園、保育園で、事故防止のキャンペーン（劇や紙芝居）を希望します。(40代 女性)

カ 不審者が出たとかの連絡は学校からあるが、その人が捕まったかどうなったのか連絡が一切ない。(40代 女性)

キ 学校で遊べる時間を長くして欲しいと思います。そうすれば、帰ってからどこかに出かけて遊ぶこともないので、事故にあう可能性も少なくなると思います。(30代 女性)

(8) 器具・設備等に関して

- ア 回転ドアは大人でも危ないと思うし、地震や火災などの時を考えると、本当に怖いと思います。(30代 女性)
- イ 回転ドア以外にも重い鉄の扉やガラス扉などは、衝突や挟まれの事故が起きやすいと思われるので、防止策をもっと積極的に講じて欲しい。(40代 女性)
- ウ エスカレーターにも子供の手すりをつけて欲しい。(30代 女性)
- エ 危険な所や工事中の所などは、子供が入れないように、柵などしっかり作って下さい。(30代 女性)
- オ 子供が興味を引くようなスイッチ、ボタンなどは、できるだけカバーなどをして触れられないようにして下さい。(40代 女性)

(9) 自転車に関して

- ア 歩道を走る自転車はすごく危ないと思います。マナーは感じられず、小さな子供を連れていると、いつも(危険を)感じます。何か規制する方法はないのでしょうか。我が物顔でスピードを出されては迷惑です。(40代 女性)
- イ 商店街など、人ごみの場所(区間)では、自転車に乗らず押さねばならない時間帯などをつくって、違反した人などは、罰則を適用するなど徹底して欲しい。(40代 女性)
- ウ 自転車教室等をもっと開いて安全教育をして欲しい。(40代 女性)

(10) 子供に関して

- ア 事故再発防止のために、法律や管理責任など問うことも大事ですが、子供自身が安全に遊ぶ技をいろんな経験から体得していくべきだと思います。日頃から子供にニュースで起きていることは、身近で起き得ることを伝えています。(30代 女性)
- イ 言い聞かせて理解できる年齢と身体(体格)との比例は必ずしも一致しないので、社会全体がそのことを考慮して、安全対策を考えて欲しい。(40代 女性)
- ウ 子供は、予期せぬところでケガをします。どんなに注意をしても起こる事もあります。日々、口うるさく伝えて生活する中で、ここは危険だ、注意しなければいけない、という気持ちが育つように努力しています。(30代 女性)
- エ 自然の中で遊ぶことの少ない今の子供たちは、「当たり前に分かるであろう」はずのことがわからなかったり、危険を予測できない状況を変えることもできないので、「危なそう」の時点でそういうものは排除するほうが安全。そこから学習する・・・と期待しない方がいいと思う。(30代 女性)
- オ 子供には、日頃から常に頭で考えて行動するようにと言っています。身の回りには危険なことが多いので、自らが注意を働かさないといけないと思います。(40代 女性)

第2 小学校教員の意識調査結果の基本データ

小学校教員の意識調査の各質問項目に対する回答結果については、以下のとおりである。

1 子供が遭遇した事故

小学校教員（担任の先生）38人からの回答があるが、質問により回答がなかったものや複数回答可のものがあるため、回答の合計は一定とはならない。

- (1) 担任する児童（担任であった児童）が、学校内で事故にあったことがあるかについて

小学校教員が児童の事故を知っているのは20人、52.6%である。

【表5-19】

	1年生	%	2年生	%	3年生	%	4年生	%	5年生	%	6年生	%	合計	%
はい	3	42.9%	5	83.3%	2	50.0%	4	50.0%	2	40.0%	4	50.0%	20	52.6%
いいえ	4	57.1%	1	16.7%	2	50.0%	4	50.0%	3	60.0%	4	50.0%	18	47.4%
合計	7	100.0%	6	100.0%	4	100.0%	8	100.0%	5	100.0%	8	100.0%	38	100.0%

- (2) 担任する児童（担任であった児童）が、学校内でいつ事故にあったかについて
全体では、高い割合の順から、休み時間（50.0%）、授業中（11.5%）、放課後（11.5%）である。

【表5-20】

	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	合計	%
授業中			1			1	1	3	11.5%
休み時間	3	3	1	1	3	2		13	50.0%
放課後	1					2		3	11.5%
休日		1						1	3.8%
不明		1		1	1	1	2	6	23.1%
合計	4	5	2	2	4	6	3	26	100.0%

- (3) 事故にあった場所について

全体では、高い割合の順から、校庭（34.6%）、教室（30.8%）、体育館（11.5%）、廊下（11.5%）である。

【表5-21】

	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	合計	%
教室		2	1	1	1	1	2	8	30.8%
体育館		1	1	1				3	11.5%
プール									
校庭	2	1			1	4	1	9	34.6%
廊下	1	1			1			3	11.5%
階段					1			1	3.8%
その他	1					1		2	7.7%
合計	4	5	2	2	4	6	3	26	100.0%

- (4) 受傷形態について

全体では、高い割合の順から、転倒・転落（38.5%）、衝突（30.8%）である。

【表5-22】

	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	合計	%
転倒・転落	2	3	1		2	1	1	10	38.5%
挟まれ	1							1	3.8%
衝突	1	2	1	1	1	2		8	30.8%
誤飲									
その他				1	1	3	2	7	26.9%
合計	4	5	2	2	4	6	3	26	100.0%

(5) 何をしているときに事故にあったかについて

全体では、高い割合の順から、遊び (42.3%)、歩行・走行 (23.1%)、運動中 (11.5%) である。

【表5-23】

	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	合計	%
歩行・走行	2	2	1		1			6	23.1%
勉強中				1				1	3.8%
運動中			1			1	1	3	11.5%
遊び	2	3		1	3	2		11	42.3%
掃除・行事の準備や片づけ									
給食						1		1	3.8%
その他						2	2	4	15.4%
合計	4	5	2	2	4	6	3	26	100.0%

(6) 関連器物について

全体では、高い割合の順から、体育用具・遊具 (23.1%)、机・イス・棚 (7.7%)、階段 (7.7%) である。

【表5-24】

	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	合計	%
机・イス・棚			1		1			2	7.7%
階段		1			1			2	7.7%
廊下									
ベランダ									
窓・サッシ									
ドア									
体育用具・遊具	1	1			1	2	1	6	23.1%
樹木									
その他	3	3	1	2	1	4	2	16	61.5%
不明									
合計	4	5	2	2	4	6	3	26	100.0%

(7) 受傷部位について

全体では、高い割合の順から、頭・顔 (60.7%)、腕及び手 (21.4%)、足 (17.9%) である。

【表5-25】

	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	合計	%
頭・顔	2	5	1	2	2	3	2	17	60.7%
腕	1						1	2	7.1%
手	1		1			2		4	14.3%
胸部									
腹部									
背中									
足					2	3		5	17.9%
その他									
合計	4	5	2	2	4	8	3	28	100.0%

21.4%

(8) 事故にあった時の教員の行動について

全体では、高い割合の順から、保健室に行った（44.0%）、家庭に連絡（38.0%）、病院に連絡（8.0%）である。

【表5-26】

	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	合計	%
保健室に行った	3	4	2	2	4	4	3	22	44.0%
家庭に連絡	4	4	1		3	4	3	19	38.0%
119番通報	1					1		2	4.0%
病院に連絡			1		1	1	1	4	8.0%
何もしない		1						1	2.0%
その他	1				1			2	4.0%
合計	9	9	4	2	9	10	7	50	100.0%

(9) ケガの程度について

全体では、高い割合の順から、通院（80.8%）、病院には行かなかった（15.4%）である。

【表5-27】

	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	合計	%
病院には行かなかった		1		1		2		4	15.4%
通院	4	4	2	1	3	4	3	21	80.8%
入院					1			1	3.8%
合計	4	5	2	2	4	6	3	26	100.0%

2 事故には至らなかったヒヤリ・ハット事案

小学校教員（担任の先生）38人からの回答があるが、質問により回答がなかったものや複数回答可のものがあるため、回答の合計は一定とはならない。

(1) ヒヤッとした・ハッとした危険を感じた経験について

担任の先生が児童のヒヤッとした・ハッとした危険を感じたのは32人、84.2%である。

【表5-28】

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	合計	%
感じたことがある	7	4	3	8	4	6	32	84.2%
感じたことがない		2	1		1	2	6	15.8%
合計	7	6	4	8	5	8	38	100.0%

(2) 事故にあいそうになった場所について

全体では、高い割合の順から、教室（31.3%）、校庭（25.0%）、廊下（21.9%）、体育館（15.6%）である。

【表5-29】

	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	合計	%
教室	1	3	1		3	2		10	31.3%
体育館		1		1	1	2		5	15.6%
プール									
校庭	1	1	2	2		1	1	8	25.0%
廊下	2	1				2	2	7	21.9%
階段					1	1		2	6.3%
その他									
合計	4	6	3	3	5	8	3	32	100.0%

(3) どのような事故にあいそうになったのかについて

全体では、高い割合の順から、転倒・転落（48.4%）、衝突（38.7%）である。

【表5-30】

	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	合計	%
転倒・転落		2		2	4	5	2	15	48.4%
挟まれ	1	1						2	6.5%
衝突	3	3	2	1		2	1	12	38.7%
誤飲									
その他			1		1			2	6.5%
合計	4	6	3	3	5	7	3	31	100.0%

(4) 何をしているときに事故にあいそうになったかについて

全体では、高い割合の順から、遊び（32.3%）、歩行・走行（29.0%）、運動中（19.4%）である。

【表5-31】

	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	合計	%
歩行・走行	2	3				2	2	9	29.0%
勉強中				3		1		4	12.9%
運動中	1	1			1	2	1	6	19.4%
遊び		1	3	1	3	2		10	32.3%
掃除・行事の準備や片づけ	1							1	3.2%
給食									
その他		1						1	3.2%
合計	4	6	3	4	4	7	3	31	100.0%

(5) 関連器物について

全体では、高い割合の順から、体育用具・遊具（16.1%）、廊下（16.1%）、机・イス・棚（12.9%）である。

【表5-32】

	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	合計	%
机・イス・棚		1			2	1		4	12.9%
階段					1	1		2	6.5%
廊下	2	1				1	1	5	16.1%
ベランダ									
窓・サッシ						1		1	3.2%
ドア	1					1		2	6.5%
体育用具・遊具		2	1		1	1		5	16.1%
樹木									
その他	1	2	2	3	1	1	2	12	38.7%
合計	4	6	3	3	5	7	3	31	100.0%

3 児童に対する気配り等

(1) 児童の行動を注意しているか(子供への事故防止に対する配慮)について

全体では、高い割合の順から、常に注意している（92.1%）、ときどき注意している（7.9%）で、常に注意している、ときどき注意しているを合わせると、100.0%となる。

【表5-33】

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	合計	%
常に注意している	6	5	4	8	4	8	35	92.1%
ときどき注意している	1	1			1		3	7.9%
注意していない								
合計	7	6	4	8	5	8	38	100.0%

4 事故防止に関する小学校教員（担任の先生）の意識

- (1) 事故が起こりやすい公園の遊具は取り除き、設置すべきではないかについて
全体では、はい（28.9%）、いいえ（23.7%）、どちらとも言えない（44.7%）である。

【表5-34】

	全学年	%
はい	11	28.9%
いいえ	9	23.7%
どちらとも言えない	17	44.7%
不明	1	2.6%
合計	38	100.0%

- (2) 駅、デパート、スーパー等での事故防止について、法律で定めるべきであるかについて
全体では、はい（31.6%）、いいえ（7.9%）、どちらとも言えない（52.6%）である。

【表5-35】

	全学年	%
はい	12	31.6%
いいえ	3	7.9%
どちらとも言えない	20	52.6%
不明	3	7.9%
合計	38	100.0%

- (3) 軽度な事故は、その後の安全な行動をするうえで良い経験であるかについて
全体では、はい（42.1%）、いいえ（13.2%）、どちらとも言えない（42.1%）である。

【表5-36】

	全学年	%
はい	16	42.1%
いいえ	5	13.2%
どちらとも言えない	16	42.1%
不明	1	2.6%
合計	38	100.0%

- (4) 保護者・大人が、子供の事故の様子、事故を防ぐことが大事であること（事故に至る過程）を理解するようになれば、子供の大きな事故は少なくできるかについて
全体では、はい（63.2%）、どちらとも言えない（36.8%）である。

【表5-37】

	全学年	%
はい	24	63.2%
いいえ		
どちらとも言えない	14	36.8%
不明		
合計	38	100.0%

- (5) 学校管理下で発生している重傷を伴う事故は、教職員による施設・設備の安全管理を徹底することにより、軽減させることができるかについて
全体では、はい（47.4%）、いいえ（5.3%）、どちらとも言えない（47.4%）である。

【表5-38】

	全学年	%
はい	18	47.4%
いいえ	2	5.3%
どちらとも言えない	18	47.4%
不明		
合計	38	100.0%

- (6) 学校管理下で発生している重傷を伴う事故は、安全教育を徹底することにより、軽減させることができるかについて
全体では、はい（63.2%）、いいえ（2.6%）、どちらとも言えない（34.2%）である。

【表5-39】

	全学年	%
はい	24	63.2%
いいえ	1	2.6%
どちらとも言えない	13	34.2%
不明		
合計	38	100.0%

第3 小学生が遭遇した事故についてのアンケート調査結果の基本データ

小学生の各質問項目に対する回答結果については、以下のとおりである。

なお、466人からの回答があるが、質問により回答がなかったものや複数回答可のものがあるため、回答の合計は一定とはならない。

1 小学生になってから事故にあったことがあるかについて

小学生になってから事故にあったことがあるのは、308人、66.1%である。

【表5-40】

	3年生	%	4年生	%	5年生	%	6年生	%	合計	%
はい	74	63.2%	82	63.6%	80	74.1%	72	64.3%	308	66.1%
いいえ	43	36.8%	47	36.4%	28	25.9%	40	35.7%	158	33.9%
合計	117	100.0%	129	100.0%	108	100.0%	112	100.0%	466	100.0%

2 いつ事故にあったかについて

全体では、高い割合の順から、遊んでいる時（22.5%）、家にいる時（17.3%）、遊びに行く時・帰る時（12.9%）、休み時間（10.2%）である。

【表5-41】

	3年生	%	4年生	%	5年生	%	6年生	%	合計	%
登校・下校する時	2	2.5%	9	9.8%	4	4.3%	6	7.9%	21	6.1%
授業中	4	4.9%	8	8.7%	7	7.5%	5	6.6%	24	7.0%
休み時間	10	12.3%	10	10.9%	10	10.8%	5	6.6%	35	10.2%
遊びに行く時・帰る時	13	16.0%	10	10.9%	11	11.8%	10	13.2%	44	12.9%
遊んでいる時	17	21.0%	19	20.7%	19	20.4%	22	28.9%	77	22.5%
運動中	2	2.5%	7	7.6%	9	9.7%	4	5.3%	22	6.4%
塾、習い事に行く時・帰る時	2	2.5%	4	4.3%	5	5.4%	4	5.3%	15	4.4%
買い物、お使いに行く時・帰る時	2	2.5%	6	6.5%	4	4.3%	2	2.6%	14	4.1%
家にいる時	16	19.8%	14	15.2%	18	19.4%	11	14.5%	59	17.3%
その他	10	12.3%	5	5.4%	4	4.3%	7	9.2%	26	7.6%
不明	3	3.7%			2	2.2%			5	1.5%
合計	81	100.0%	92	100.0%	93	100.0%	76	100.0%	342	100.0%

3 何をしているときに事故にあったかについて

全体では、高い割合の順から、歩いていた及び走っていた（25.6%）、自転車に乗っていた（20.4%）、遊具で遊んでいた（9.9%）である。

【表5-42】

	3年生	%	4年生	%	5年生	%	6年生	%	合計	%
歩いていた	6	7.8%	15	17.0%	8	9.2%	7	9.7%	36	11.1%
走っていた	7	9.1%	17	19.3%	13	14.9%	10	13.9%	47	14.5%
食べていた・飲んでいた	4	5.2%	1	1.1%	2	2.3%	5	6.9%	12	3.7%
ふざけていた	8	10.4%	7	8.0%	3	3.4%	8	11.1%	26	8.0%
自転車に乗っていた	16	20.8%	16	18.2%	20	23.0%	14	19.4%	66	20.4%
自動車に乗っていた			5	5.7%	1	1.1%			6	1.9%
電車・バスに乗っていた										
遊具で遊んでいた	7	9.1%	7	8.0%	12	13.8%	6	8.3%	32	9.9%
おもちゃ・ゲームで遊んでいた	3	3.9%			1	1.1%			4	1.2%
その他	20	26.0%	17	19.3%	25	28.7%	22	30.6%	84	25.9%
不明	6	7.8%	3	3.4%	2	2.3%			11	3.4%
合計	77	100.0%	88	100.0%	87	100.0%	72	100.0%	324	100.0%

25.6%

4 受傷形態について

全体では、高い割合の順から、転んだ及び落ちた（34.8%）、ぶつかった（20.6%）である。

【表5-43】

	3年生	%	4年生	%	5年生	%	6年生	%	合計	%
転んだ	27	31.0%	28	28.6%	26	23.9%	9	11.4%	90	24.1%
落ちた	9	10.3%	16	16.3%	10	9.2%	5	6.3%	40	10.7%
ぶつかった	14	16.1%	23	23.5%	26	23.9%	14	17.7%	77	20.6%
挟まった	2	2.3%	5	5.1%	3	2.8%	3	3.8%	13	3.5%
喉に詰まった	3	3.4%	1	1.0%			3	3.8%	7	1.9%
誤飲した	3	3.4%							3	0.8%
火傷をした	5	5.7%	6	6.1%	8	7.3%	7	8.9%	26	7.0%
刃物で切った	2	2.3%	4	4.1%	7	6.4%	5	6.3%	18	4.8%
動物にかまれた	2	2.3%	2	2.0%	5	4.6%	1	1.3%	10	2.7%
虫に刺された	4	4.6%	1	1.0%	3	2.8%	6	7.6%	14	3.8%
溺れた	1	1.1%	1	1.0%	2	1.8%	1	1.3%	5	1.3%
気持ちが悪くなった	2	2.3%	1	1.0%	5	4.6%			8	2.1%
その他	11	12.6%	9	9.2%	13	11.9%	24	30.4%	57	15.3%
不明	2	2.3%	1	1.0%	1	0.9%	1	1.3%	5	1.3%
合計	87	100.0%	98	100.0%	109	100.0%	79	100.0%	373	100.0%

} 34.8%

5 事故にあった場所（その1）について

全体では、高い割合の順から、学校（26.1%）、道路（25.8%）、家（22.0%）、公園・広場・遊び場（14.8%）である。

【表5-44】

	3年生	%	4年生	%	5年生	%	6年生	%	合計	%
学校	20	24.1%	26	28.6%	25	27.5%	17	23.6%	88	26.1%
公園・広場・遊び場	13	15.7%	15	16.5%	13	14.3%	9	12.5%	50	14.8%
遊園地	1	1.2%							1	0.3%
家	21	25.3%	14	15.4%	27	29.7%	12	16.7%	74	22.0%
デパート・スーパー・お店			1	1.1%			1	1.4%	2	0.6%
駅										
道路	22	26.5%	26	28.6%	19	20.9%	20	27.8%	87	25.8%
その他	3	3.6%	6	6.6%	5	5.5%	13	18.1%	27	8.0%
不明	3	3.6%	3	3.3%	2	2.2%			8	2.4%
合計	83	100.0%	91	100.0%	91	100.0%	72	100.0%	337	100.0%

6 事故にあった場所（その2）について

全体では、高い割合の順から、校庭（23.9%）、部屋（20.7%）、教室（10.3%）、廊下・通路（10.3%）である。

【表5-45】

	3年生	%	4年生	%	5年生	%	6年生	%	合計	%
玄関・昇降口	2	4.9%	3	6.4%	3	4.9%	3	8.6%	11	6.0%
教室	3	7.3%	4	8.5%	6	9.8%	6	17.1%	19	10.3%
部屋	11	26.8%	9	19.1%	13	21.3%	5	14.3%	38	20.7%
体育館	1	2.4%	6	12.8%	5	8.2%	3	8.6%	15	8.2%
校庭	11	26.8%	12	25.5%	13	21.3%	8	22.9%	44	23.9%
食堂・台所	2	4.9%	1	2.1%	4	6.6%	3	8.6%	10	5.4%
廊下・通路	4	9.8%	5	10.6%	7	11.5%	3	8.6%	19	10.3%
図書室					1	1.6%			1	0.5%
トイレ	1	2.4%							1	0.5%
階段	1	2.4%	5	10.6%	3	4.9%			9	4.9%
おふろ場							1	2.9%	1	0.5%
ベランダ										
屋根	1	2.4%							1	0.5%
屋上										
庭	3	7.3%	1	2.1%	2	3.3%	2	5.7%	8	4.3%
プール	1	2.4%	1	2.1%	4	6.6%	1	2.9%	7	3.8%
水飲み場										
レストラン										
デパート・スーパー・お店の売り場										
ゲームセンター										
その他										
合計	41	100.0%	47	100.0%	61	100.0%	35	100.0%	184	100.0%

7 関連器物について

全体では、高い割合の順から、自転車(23.9%)、机・テーブル、イス及び家具(10.5%)、遊具(すべり台、ぶらんこ、シーソー、鉄棒、滑り棒・登り棒、ジャングルジム及び雲梯・太鼓橋の合計、11.2%)である。

【表5-46】

	3年生	%	4年生	%	5年生	%	6年生	%	合計	%
バス										
電車	1	1.5%							1	0.4%
机・テーブル	5	7.5%	2	2.9%	4	5.1%	3	5.0%	14	5.1%
イス	2	3.0%	1	1.4%	4	5.1%	1	1.7%	8	2.9%
家具	2	3.0%	1	1.4%	3	3.8%	1	1.7%	7	2.5%
窓	2	3.0%			1	1.3%	2	3.3%	5	1.8%
ドア	1	1.5%	3	4.3%	3	3.8%	6	10.0%	13	4.7%
おもちゃ			1	1.4%	2	2.5%			3	1.1%
自動車	3	4.5%	5	7.1%	4	5.1%	4	6.7%	16	5.8%
自転車	17	25.4%	19	27.1%	20	25.3%	10	16.7%	66	23.9%
自転車の補助イス			2	2.9%	1	1.3%			3	1.1%
電車・バス										
すべり台	1	1.5%	1	1.4%	1	1.3%			3	1.1%
ぶらんこ	4	6.0%	3	4.3%	3	3.8%	3	5.0%	13	4.7%
シーソー										
鉄棒	2	3.0%	2	2.9%	2	2.5%			6	2.2%
滑り棒・登り棒					2	2.5%	1	1.7%	3	1.1%
ジャングルジム					1	1.3%	1	1.7%	2	0.7%
雲梯・太鼓橋	1	1.5%	1	1.4%	2	2.5%			4	1.4%
木	2	3.0%	1	1.4%			5	8.3%	8	2.9%
図画工作用具	1	1.5%	1	1.4%	3	3.8%	3	5.0%	8	2.9%
掃除用具										
はさみ			1	1.4%	2	2.5%	1	1.7%	4	1.4%
包丁	2	3.0%	1	1.4%	1	1.3%			4	1.4%
ナイフ・カッター	1	1.5%	2	2.9%			1	1.7%	4	1.4%
エスカレーター	2	3.0%	1	1.4%					3	1.1%
エレベーター	1	1.5%							1	0.4%
台所用品	3	4.5%	2	2.9%	2	2.5%	3	5.0%	10	3.6%
その他	14	20.9%	20	28.6%	18	22.8%	15	25.0%	67	24.3%
合計	67	100.0%	70	100.0%	79	100.0%	60	100.0%	276	100.0%

8 受傷部位について

全体では、高い割合の順から、足（33.8%）、腕及び手（30.3%）、頭・顔（15.5%）である。

【表5-47】

	3年生	%	4年生	%	5年生	%	6年生	%	合計	%
頭・顔	8	9.1%	15	15.2%	26	21.8%	12	13.6%	61	15.5%
腕	8	9.1%	9	9.1%	12	10.1%	11	12.5%	40	10.2%
手	20	22.7%	20	20.2%	20	16.8%	19	21.6%	79	20.1%
胸部	1	1.1%			1	0.8%	4	4.5%	6	1.5%
腹部			1	1.0%	5	4.2%	3	3.4%	9	2.3%
背中	4	4.5%	1	1.0%	3	2.5%	3	3.4%	11	2.8%
足	31	35.2%	43	43.4%	35	29.4%	24	27.3%	133	33.8%
その他	6	6.8%	2	2.0%	6	5.0%	8	9.1%	22	5.6%
不明	10	11.4%	8	8.1%	11	9.2%	4	4.5%	33	8.4%
合計	88	100.0%	99	100.0%	119	100.0%	88	100.0%	394	100.0%

} 30.3%

9 事故にあった後の行動について

全体では、高い割合の順から、病院に行った（33.4%）、家族（家の人）に手当てをしてもらった及び近所の人に手当てをしてもらった（25.9%）、がまんした・自分で手当てをした（17.9%）、保健室に行った（16.1%）である。

【表5-48】

	3年生	%	4年生	%	5年生	%	6年生	%	合計	%
保健室に行った	12	14.1%	18	17.5%	18	17.5%	14	14.7%	62	16.1%
病院に行った	21	24.7%	31	30.1%	34	33.0%	43	45.3%	129	33.4%
入院した	1	1.2%	2	1.9%	2	1.9%	4	4.2%	9	2.3%
家族（家の人）に手当てをしてもらった	24	28.2%	25	24.3%	20	19.4%	22	23.2%	91	23.6%
近所の人に手当てをもらった	4	4.7%	3	2.9%	3	2.9%	2	2.1%	12	3.1%
がまんした・自分で手当てをした	20	23.5%	17	16.5%	23	22.3%	9	9.5%	69	17.9%
その他	1	1.2%							1	0.3%
不明	2	2.4%	7	6.8%	3	2.9%	1	1.1%	13	3.4%
合計	85	100.0%	103	100.0%	103	100.0%	95	100.0%	386	100.0%

} 25.9%

第6章 文献調査

第1 児童発達学に関すること

1 児童発達心理学

(1) 乳児期から幼児期にかけての成長・発達の過程から

ア 新生児期の反射と対応(参1)

表 6-1 新生児期の反射と対応

行動	反射	対応
乳を飲む行動	口唇探索反射 吸引反射	・口元を軽くつつくと、さわった方向に頭を向ける ・口の中に指を入れると吸う
危険なものから 身を守る行動	引っ込み反射 瞬目反射	・足の裏をピンでつつくと、足を引っ込める ・物が急速に迫ってきたり、まぶしい光を急にあてるとまぶたを閉じる
抱きつく行動	モロー反射	・仰向けに寝かせ、頭の支えを急にはずすと、両腕を広げ、誰かを抱きしめるかのように腕をもどす
物をつかむ行動	把握反射	・手のひらに指を入れ、押すと、その指を握りしめる
歩く行動	歩行反射	・わき下で身体を支え、床に立たせると、律動的なステップ運動がおこる
泳ぐ行動	泳ぎ反射	・うつ向けで水につけると、腕と脚を使って泳ぐような運動がおこる

新生児の行動には上記のような行動がある。新生児とは、1歳未満の子供のことをいう。

イ 物のつかみ方の発達(乳児) (参2)

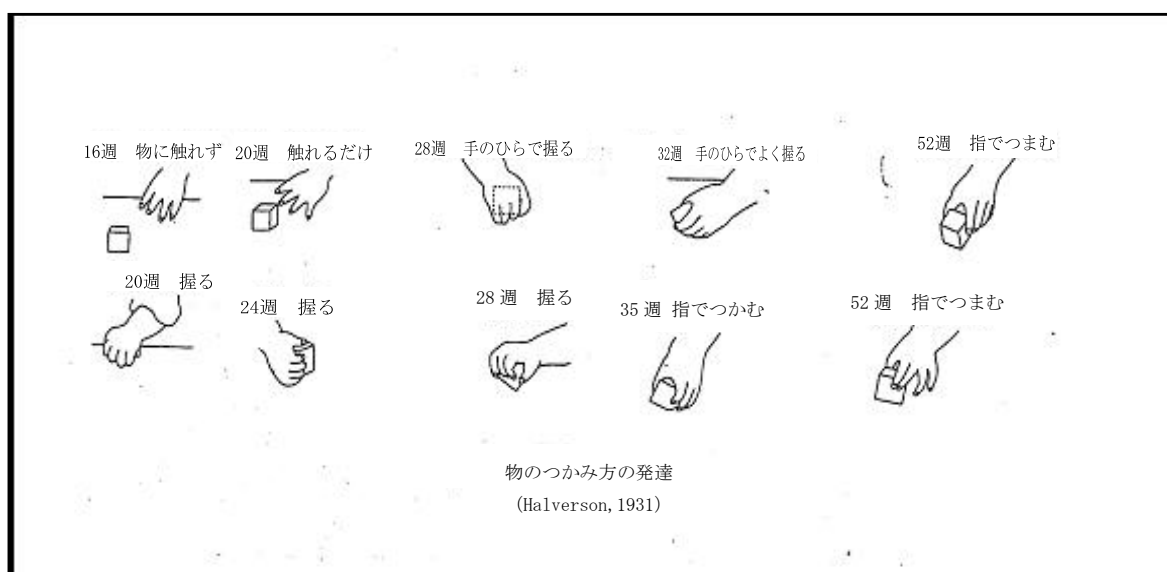


図 6-1 物のつかみ方の発達

手の発見

3ヶ月頃（16週頃）、乳児は目覚めて静かにしているときに、しっかり握った片手のこぶしをかかげるようにして、じっと注視するようになる。この時期はまだ物に触れない。20週になると物に対して触れたり、握ったりするようになる。その後24週から32週にかけて、握るという動作が発達してくる。始めは手全体で握ることから、次第に手のひらでしっかり握れるようになってくる。36週になると、今度は指を使ってつかむという動作がみられるようになり、52週（10～11ヶ月）にかけて発達してくる。始めは指全体を使ってつかんでいたものが、徐々に親指とほか4本の指へわかれ、52週頃には親指と人差し指でものをつかめるようになってくる。

☆この文献からわかること☆

表 6-1 からわかるように、新生児期にはいくつかの行動とその反射、対応がある。乳幼児の事故に多い異物・誤飲で考えてみると、たとえば、近くにあるおもちゃに手が届き、握りしめる（物をつかむ行動）、それを口元に持っていき、口の中に入れる（乳を飲む行動）といった一連の行動もこの行動発達に沿った行動といえるかもしれない。

また、図 6-1 は乳児の、物のつかみ方の発達を表したものであるが、この表からわかるように、生後20週を過ぎた頃から物を手で握るという行動が見られるようになる。このことから、手の届く範囲にある物で、乳児の手に握れる大きさの物であれば自分の方に引き寄せることができると考えられる。

(2) 乳幼児の運動発達 (参1)

表 6-2 乳幼児の運動発達

運動発達	時 期	運動発達	時 期
首がすわる	3～4ヶ月	ひとり立ち	12ヶ月(1歳)
寝返りをうつ	5～6ヶ月	ひとり歩き	12～15ヶ月
おすわりをする	7ヶ月	片足立ち	3歳
後方に這う	7～8ヶ月	片足とび	4～5歳
前方に這う	8～9ヶ月	スキップ	5～6歳
つかまり立ち	9～10ヶ月		

乳幼児の運動の発達は表 6-2 のとおりである。身体の成長と共に行動も発達する。生まれてから3～4ヶ月すると、首がすわるようになる。5～6ヶ月くらいになると寝ているときに寝返りをうつようになる。7～9ヶ月の間にハイハイで前進したり、後進したりするようになる。その後、つかまり立ちを経て、1歳前後にはひとり立ち、ひとり歩きするようになる。その後、身体も運動能力もともに発達し、3歳には片足立ち、4歳には片足とび、5歳くらいになるとスキップができるようになる。ただし、この運動発達はあくまで目安であり、発達には個人差がある。

☆この文献からわかること☆

0～5歳にかけての子供は、この5年という限られた期間の間に、寝ているところから座り、立ち上がり、歩き、走るように大きな変化をとげる。その変化の途中に、まだ、バランスのとれない身体でハイハイしたり、立ったり、歩く、走るといった運動を行えば、自ずとバランスを崩し転倒したり、場所によっては転落・墜落するといった事故が起こる可能性がある。また、ハイハイをしたり、ひとり歩きを始めるようになれば、行動範囲もかなり広がると考えられる。

(3) 年齢による遊びの変化 (参1)

年齢とともに遊びも変わってくる。年齢別傾向についてまとめた。

表 6-3 年齢による遊びの変化

段 階		遊 び
遊 戯 萌 芽 期 (生 後 1 歳 まで)		授乳の際、母親の胸をおしたり、衣服をひっぱったりする。いろいろなものを、口に入れてみる。いろいろな音声をだす。
モザイク的遊戯期 (2歳)		一つ一つの遊びの継続時間は10分くらいで遊びの内容は次々と変化していく。断片的な遊戯活動の連鎖である。大部分一人遊びの段階であるが、後半には平行遊びも認められる。
模 倣 的 遊 戯 期	前 期 (3歳)	3人くらいの集団で遊べる。低次の連合遊びが可能で、玩具の貸し借りが見られる。継続時間も1時間くらいになる。性的差異も生じる。虚構遊び(ごっこ遊び)が代表的なものである。しかし、幾種類かの遊びが混在する。
	後 期 (4歳)	ボール遊び、描画、紙切りなどが可能になる。ルールを守っての遊びも見られるようになる。ごっこ遊びの最盛期。集団での遊びは一層うまくなり、高次の連合遊びも認められるようになる。
想 象 的 遊 戯 期 (5歳)		玩具がもっとも重要な役割を演じる。遊びは用いられる遊具によって決定される。高次の連合遊びが可能になり、遊戯集団は5～6人くらいまで増加する。地位や役割も認められる。遊びが欲求不満の代償的満足やカタルシスを獲得する手段に用いられる。
社 会 的 遊 戯 期 (6～9歳)		集団遊びでは、玩具はあまり用いられなくなる。集団での社会的な遊びが増加してくる。読書や描画、工作なども多くなる。

年齢が上がるにつれ、遊びがより外向的、集団的になっていくことがわかる。

1歳までは、いろいろなものを自分の手に届く範囲で手当たり次第口に入れてしまったり、手でつかめるものをひっぱったりする行動が見られる。1歳から2歳までの時期は、ひとつの遊びを10分程度継続し、次の内容に入るというめまぐるしい遊びであり、ひとり遊びが主体である。

3歳になると、人とのかかわりの中での遊びが認められるようになる。3人くらいの集団で遊べるようになり、玩具の貸し借りを行ったり、ごっこ遊びをするようになる。ひとつの遊びも1時間程度継続するようになる。

4歳では、さらにごっこ遊びが発展し、集団での遊びもうまくなってくる。この年齢ではより複雑な遊び、ボール遊び、描画、紙切りなどが加わってくる。

5歳になると、玩具を用いた遊びが主体となり、遊びに広がりが見られるようになる。5～6人くらいの集団を形成して遊ぶようになる。

小学校入学期になる6歳から9歳の時期は、玩具を用いることは少なくなり、社会的な集団遊びが増加してくる。この時期から読書や描画、工作などが多くなる。

☆この文献からわかること☆

年齢が上がるにつれ、身体の発達とともに室内、対親との関係から、外向的で集団的な遊びへと変化していく。このことから、遊びの種類の拡大、遊ぶ場所の拡大が6～12歳で起きていることがわかる。

室内という小さな空間から屋外へと場所が広がることで、遊びに関わる物もより複雑な動きをする遊具に変わり、また体全体を使ったスポーツをするようになることがわかる。

(4) 子供の成長発達段階と遊びとの関係 (参3)

子供を安全に遊ばせるためには、子供の成長発達段階に応じた遊びの内容について知っておく必要がある。ここでは、以下に示す各段階ごとに、発達の特性と遊びの内容の変化をまとめた。

子供の成長発達段階と遊びの関係

第1段階:乳児(0～2歳)

触覚・視覚・聴覚・嗅覚・味覚が発達し、触る・握る・打つ・投げる・立ち上がって歩く・走る・跳ねるなどの基本動作を始める。全身を使って色・形・量・質感、さらに匂いや味を理解する。生後2年の間に情緒は目覚しく分化・発達し、また言葉を覚え始める。感覚運動遊びの段階であり、水や砂は遊びの楽しい素材である。幼児用のすべり台やぶらんこが使えるようになるが、完全な介護と保護が必要である。

第2段階:幼児(2～4歳)

乳歯が生えそろう消化器官が発達し体力がついてくる。三半規管の発達によりバランス機能も育ってくる。走る・飛び跳ねる・登る・ぶら下がるなどの動作がかなり可能になる。好奇心が強まり、怖いもの知らずで、すべての遊具で遊ぼうとするが、持久力はなくバランス感覚も十分ではない。どこへでも行きたがるので、目が離せない。監視と保護そして指導が必要である。ひとりであるいは大人との間で、ごっこ遊び等の象徴的遊びを始める。

第3段階:学齢前幼児(4～6歳、保育所・幼稚園生)

体位・体力とも一段と成長し、よじ登る・揺らす・バランスをとる・飛び降りなどの動作が活発になる。知能も発達し、このころまでに時間や空間を認識し、物事の普遍性さらに因果関係を理解する。親の手を離れ、他の子どもと集団的象徴遊びができるようになり、その中で協調性や社会性が育ってくる。危険に対する認識が乏しく、回避能力が未熟なので、遊びの内容に応じて年長者や保護者の指導が必要である。

第4段階:低学年児童(6～9歳、小学校1～3年)

身体の均整がとれて、運動量も増大する。バランス調整能力や俊敏性が発達する。スピードやスリルを楽しみ、過度の運動により筋肉や関節を痛めることがある。ルールのあるゲーム遊びを通じて、子ども同士に秩序と上下関係ができて、子供社会が形成され始める。楽しく参加でき、役割を果たしているか、注目しよう。

第5段階:高学年児童(9～12歳、小学校4～6年)

身長、体重とも伸び盛りである。肉体的な挑戦が行われているので、失敗すれば大きなケガをすることもある。スポーツなどにより特定の筋肉や関節に負担をかけると障害を起こすことがある。知的・冒険的・建設的・創造的遊び、そしてルールのあるスポーツ性の遊びが多くなる。親への依存度が減少し、自主性を重んじ、仲間や親友をつくり、行動を共にする。いわゆるギャングエイジである。

第6段階:少年(12～15歳、中学生)

運動量にあわせて骨格や筋肉そして反射神経が発達し、遊びにも技巧的欲求が高まる。自分の趣味や目的意識が遊びの内容にも反映される。また、スポーツに没頭しチームプレイが上達する。さらに自我に目覚め、親離れする年代である。

第7段階:青年(15～18歳、高校生)

体力、運動能力は最高点に近づき肉体的な挑戦を行いたがる。スポーツを楽しむ。一方で自覚の年代であり主体性を発揮し、抽象的思考を行う。社会的行動の増加に際し、仲良しグループは大きな役割を果たす。

☆この文献からわかること☆

この文献は、0～18歳までの子供の発達段階と遊びをまとめたものである。ここから、成長していく中での各年齢の傾向をひとつの流れとしてとらえることができる。0～12歳については、各段階、年齢ごとにできることが違い、遊びも違うように、それによって起こる又は起こる可能性のある事故も違っていることがわかる。

2 子供の身体状況・体力・運動能力について

ここでは、平成16年度体力・運動能力調査結果（文部科学省）及び平成16年度東京都児童・生徒の体力テスト調査報告書（東京都教育委員会）から以下のことについてまとめた。なお、前記報告書のデータ年齢のうちから、6～12歳を抽出している。

(1) 子供の身体状況 (参4)

ア 平成16年度の年齢別身長、体重の平均

表 6-5 平成16年度の年齢別身長、体重の平均

年 齢	性別	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳
身長 (cm)	男子	116.93	122.55	128.55	133.70	138.90	145.57	153.26
	女子	115.97	121.78	127.64	134.02	141.03	147.40	147.40
体重 (kg)	男子	21.45	23.89	27.22	30.66	34.08	38.65	44.54
	女子	20.89	23.39	26.27	30.12	34.69	39.58	43.90

上記は、6～12歳の男女の身長、体重を表したものである。

イ 30年前 (昭和48年) との比較

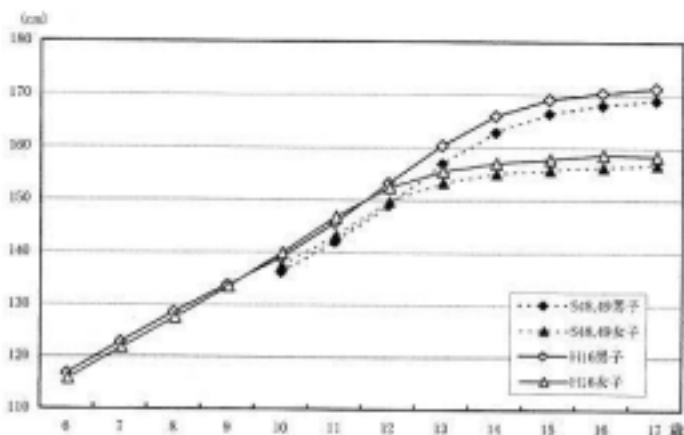


図 6-2 身長の変化

《 身長 》

これは、6～17歳の男女の身長の平均値の推移である。

男女それぞれ差はあるものの、同様の曲線をたどっている。

昭和48、49年と平成16年を比べると、男女とも平成16年のほうが平均値が高くなっている。このことから、身長は30年前と比べて全体的に伸びていることがわかる。

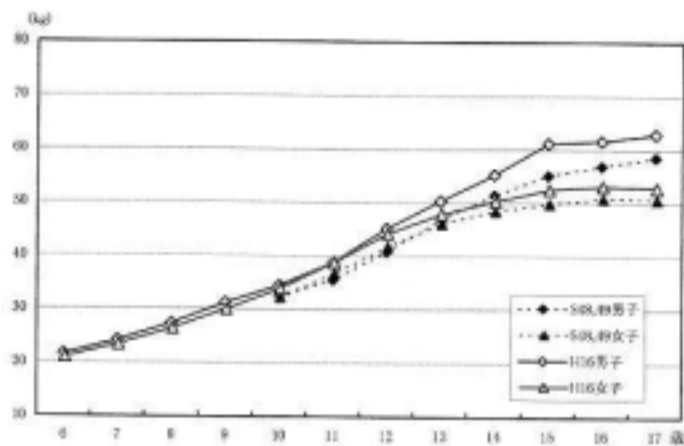


図 6-3 体重の変化

《 体重 》

これは、6～17歳の男女の体重の平均値の推移である。男女それぞれ差はあるものの、同様の曲線をたどっている。

昭和48、49年と平成16年を比べると、男女とも平成16年のほうが平均値が高くなっている。特に男子の平均値の差が大きくなっている。

このことから体重についても、30年前と比べて全体的に伸びていることがわかる。

(2) 体力・運動能力 (参5)

ここでは、体力テストの握力、反復横とび、50m走、ソフトボール投げについてまとめた。

ア 平成16年度の体力テスト調査結果

以下、6～12歳の各種目の平均値である。年齢が上がる、身体が成長するとともに数値も上がっている。

表 6-6 6～12歳の各種目の平均値

種目 \ 年齢	性別	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳
握力	男子	9.59	11.23	13.14	15.04	17.46	20.31	25.03
	女子	8.77	10.44	12.26	14.07	16.96	19.57	22.07
反復横とび	男子	26.04	30.00	34.37	38.01	41.70	44.86	47.90
	女子	25.63	28.85	32.33	35.84	39.42	41.21	43.32
50m走	男子	11.60	10.76	10.15	9.69	9.33	8.89	8.51
	女子	11.90	11.01	10.44	9.93	9.54	9.22	9.01
ソフトボール投げ ハンドボール投げ	男子	9.37	12.89	17.42	21.65	25.62	30.19	19.35
	女子	5.85	7.81	9.85	12.43	15.04	17.15	12.86

※ ソフトボール・ハンドボール投げは、12歳のみハンドボール投げの数値である。

イ 年齢別体力テストの調査結果（30年前との比較）

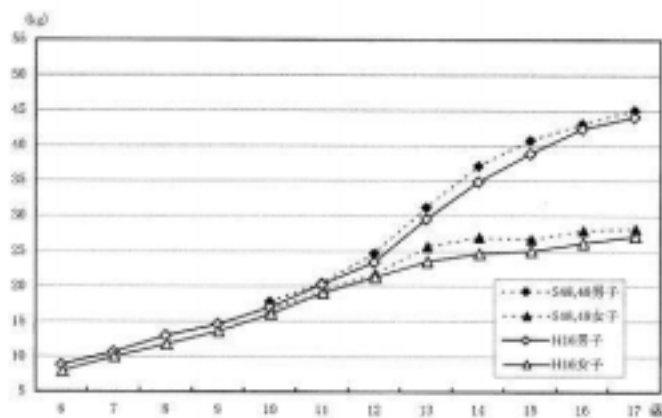


図 6-4 握力の変化

《 握 力 》

これは、6～17歳の男女の握力の平均値の推移である。

男女それぞれ差はあるものの、同様の曲線をたどっている。

昭和48、49年と平成16年を比べると、男女とも昭和48、49年のほうが平均値が高くなっている。

このことから、握力については30年前と比べると低下しているといえる。

握力とは、「物を握りしめる力」である。

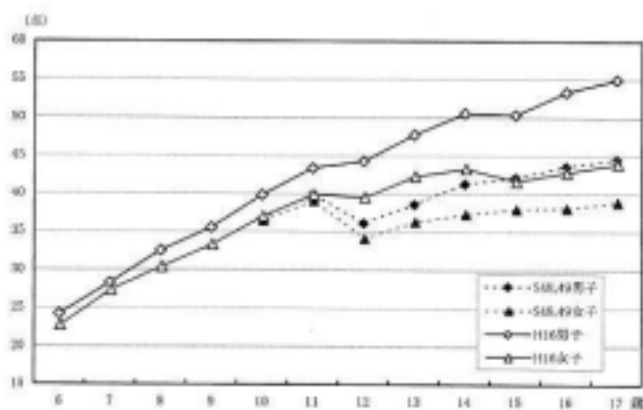


図6-5 反復横とびの変化

《反復横とび》

これは、6～17歳男女の反復横とび（平均値）の推移である。

昭和48、49年と平成16年を比べると、男女ともに平成16年が、昭和48、49年を大きく上回っている。特に男子の平均値の差が大きくなっており、差の大きいところでは10点以上の開きがある。

このことから、反復横とびについては、30年前と比べて全体的に大きく伸びていることがわかる。

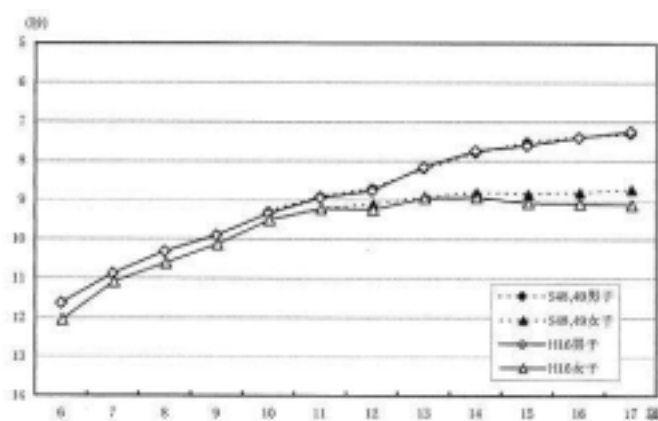


図 6-6 50m走の変化

《50m走》

これは、6～17歳男女の50m走（平均値）の推移である。

昭和48、49年と平成16年を比べると、男子では、ほぼ同じ平均値であり、女子では若干平成16年のほうが低下している。

このことから、50m走については、30年前と現在はほとんど変化がないことがわかる。

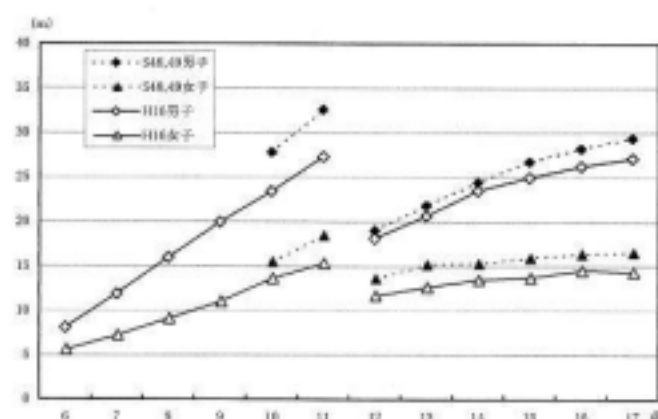


図 6-7 ソフト・ハンドボール投げの変化

※ 6～11歳は、ソフトボール投げ
12～17歳は、ハンドボール投げ

《ソフトボール投げ・ハンドボール投げ》

これは、6～17歳男女のソフトボール投げ・ハンドボール投げ（平均値）の推移である。

昭和48、49年と平成16年を比べると、男女ともに平成16年のほうが下回っていることがわかる。特に10歳、11歳の男子での平均値の差が大きくなっている。

このことから、ソフトボール投げ・ハンドボール投げについては、30年前と比べて男女ともに低下していることがわかる。

ソフトボール投げ・ハンドボール投げは、「投げる力」をみるものである。

投げるは、「手の力で遠くへ飛ばす」ことである。

(3) まとめ

30年前と比較すると、体型は身長も体重も伸びている。

体力テストにおいては、伸びているものもあれば、低下しているものもある。

↓
(反復横とび)

↓
(ハンドボール投げ、握力)

↓
腕の力、掴む力の低下

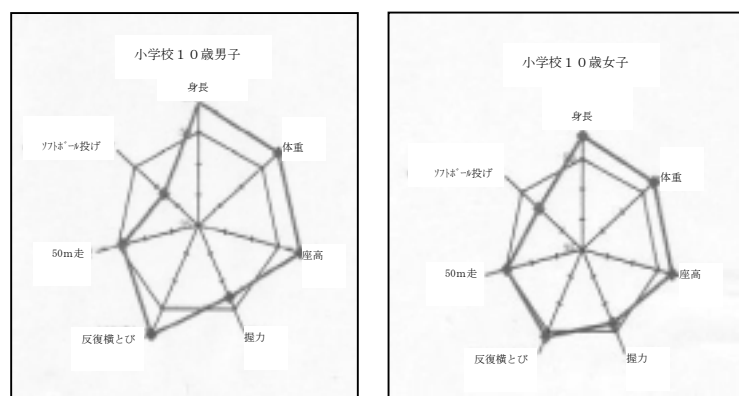


図 6-8 体力テストの変化

左の図は、10歳の男女の30年前と比べて各項目が伸びたか、低下したかを示したものである。

第2 遊び場、施設等における安全対策に関すること

子供の遊ぶ場所はさまざまであるが、ここでは「公共の場所」、例えば学校や公園といった場所、遊具での安全対策についてまとめた。

1 遊びの危険

子供は遊んでいる中でさまざまな体験をし、同時にさまざまな危険に遭遇する。この危険とは何なのか、またどうすればいいのかについて、いくつかの文献を参考にまとめた。

(1) 危険とは (参6)

平成14年3月、国土交通省から「都市公園における遊具の安全確保に関する指針」及びその解説版が出された。そのはじめにリスクとハザードという言葉が出てくる。危険には、リスクとハザードの2つがあるという。

「リスク」とは、事故の回避能力を育む危険性あるいは子どもが判断可能な危険性のことをいう。リスクは遊びの楽しみの要素で冒険や挑戦の対象となり、子どもの発達にとって必要な危険性である。

「ハザード」とは、事故につながる危険性あるいは子どもが判断不可能な危険性のことをいう。

また、このリスクとハザードははっきり区別がつくわけではないことを、遊具の面で以下のとおりまとめられている。

子どもの日常の活動・経験や身体能力に応じて事故の回避能力に個人差があり、幼児が小学生用遊具を利用することは、その遊具を安全に利用するために必要な運動能力、危険に関する予知能力、事故の回避能力などが十分でないため、ハザードとなる場合がある。

つまり、ある年齢の子供にとってはリスクであることが、年齢の低い子供ではハザードになる可能性があるということである。

(2) 危険はすべて除去すべきか (参6)

では、事故を防ぐには、危険を、リスクもハザードも含め、すべて除去すればいいのだろうか。以下2つの文献では遊び場、遊びの価値という観点から、こう書かれている。

完全にリスクを除去することは、事故の回避能力を育むといった点から問題があり、遊具が子どもにとって魅力的かつ有益であるためには、子どもの発育発達段階に応じてリスクに挑戦できる機能を備えているものであることが必要である。

ここではリスクを除去することは回避能力が育つ機会をとってしまうことになる、といている。また、もうひとつの文献では、失敗の経験から、けがをしないように工夫する知恵が身につく、と書かれている。

子どもの成長には、多様な遊び体験が不可欠である。遊具は遊びに変化を与え、発展させる。遊具が配置された遊び場は、室内環境と異なり、一般の住宅内ではできない身体全体を動かしての変化を楽しむことができる。そのような遊びの中で、子どもは経験したことのない遊びをしてみようとしたり、さまざまな意欲をもって遊んでいる。思うようにできれば、この経験がさらに次の遊びに発展していく。いつも成功するとは限らず、ときには失敗することもある。こうして事故が起こることも少なくない。失敗（けが）の経験から、次には失敗しない、けがをしないように工夫する知恵が身についてくると考えられる。

(3) 学校内での事故（参7、8）

ここでは、実際に学校内で起きた事故について「学校の管理下の災害－19」と、「学校の管理下の死亡・障害事例と事故防止の留意点」から事例を交えてまとめた。なお、ここでのデータは0～12歳に該当する各学校種を抽出した。

ア 負傷における種類別発生割合

以下は、平成13年中の小学校、幼稚園、保育所の各種別事故発生状況である。

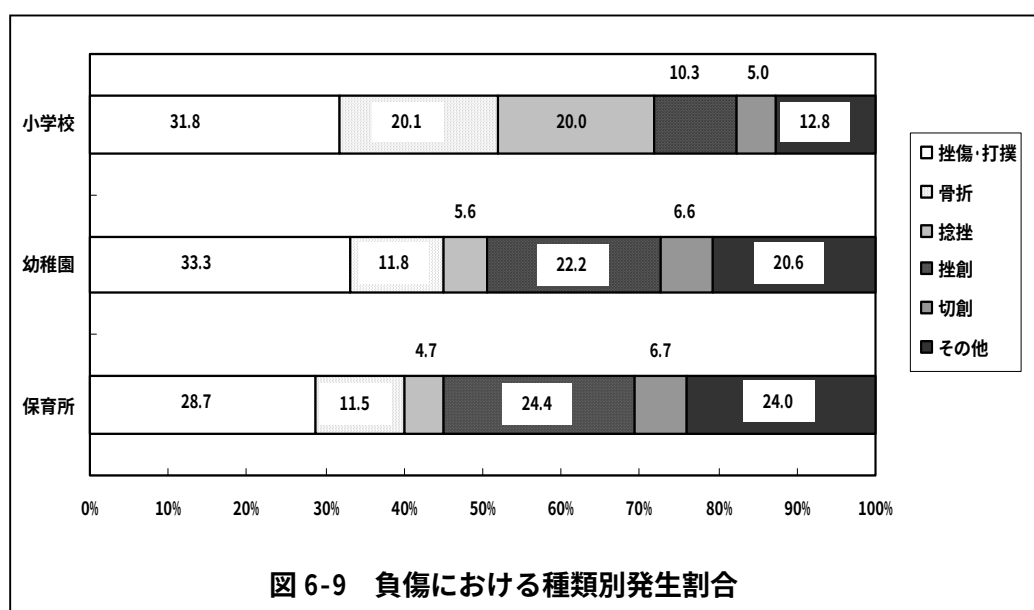


表 6-7 負傷における種類別発生割合

	挫傷・打撲	骨折	捻挫	挫創	切創	その他	合計
小学校	146,375	92,275	92,100	47,575	22,850	58,775	459,950
幼稚園	12,380	4,380	2,076	8,252	2,468	7,660	37,216
保育所	12,532	5,032	2,072	10,652	2,944	10,476	43,708

イ 負傷における部位別発生割合

以下は、平成13年中の小学校、幼稚園、保育所の各部位別事故発生状況である。

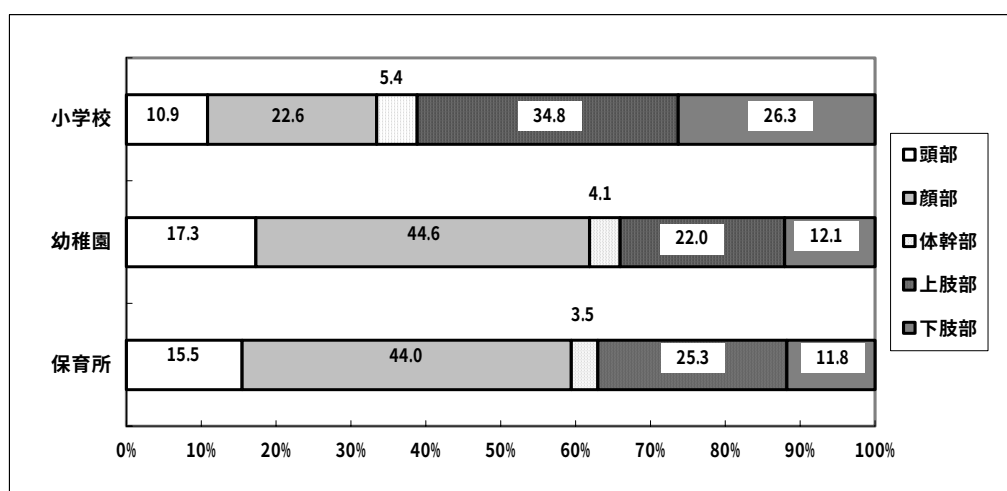


図 6-10 負傷における部位別発生割合

表 6-8 負傷における部位別発生割合

	頭部	顔部	体幹部	上肢部	下肢部	合計
小学校	49,925	103,850	25,000	160,150	121,025	459,950
幼稚園	6,436	16,588	1,512	8,176	4,504	37,216
保育所	6,760	19,220	1,548	11,044	5,136	43,708

ウ 体育用具・遊具別の発生割合

以下は、平成13年中の小学校、幼稚園、保育所各所の体育用具・遊具別の発生状況である。

表 6-9 体育用具・遊具別の発生割合

	鉄棒	ブランコ	うんてい	すべり台	ジャングルジム	固定タイヤ	回旋塔	シーソー	登り棒	逆動円木	砂場	その他	合計
小学校	5,300	4,275	3,125	2,150	2,050	1,675	700	650	625	450	350	9,250	30,600
幼稚園	808	1,236	732	2,064	612	100	56	84	284	80	300	1,692	8,048
保育所	796	1,044	708	1,972	624	124	36	60	260	32	428	1,392	7,476

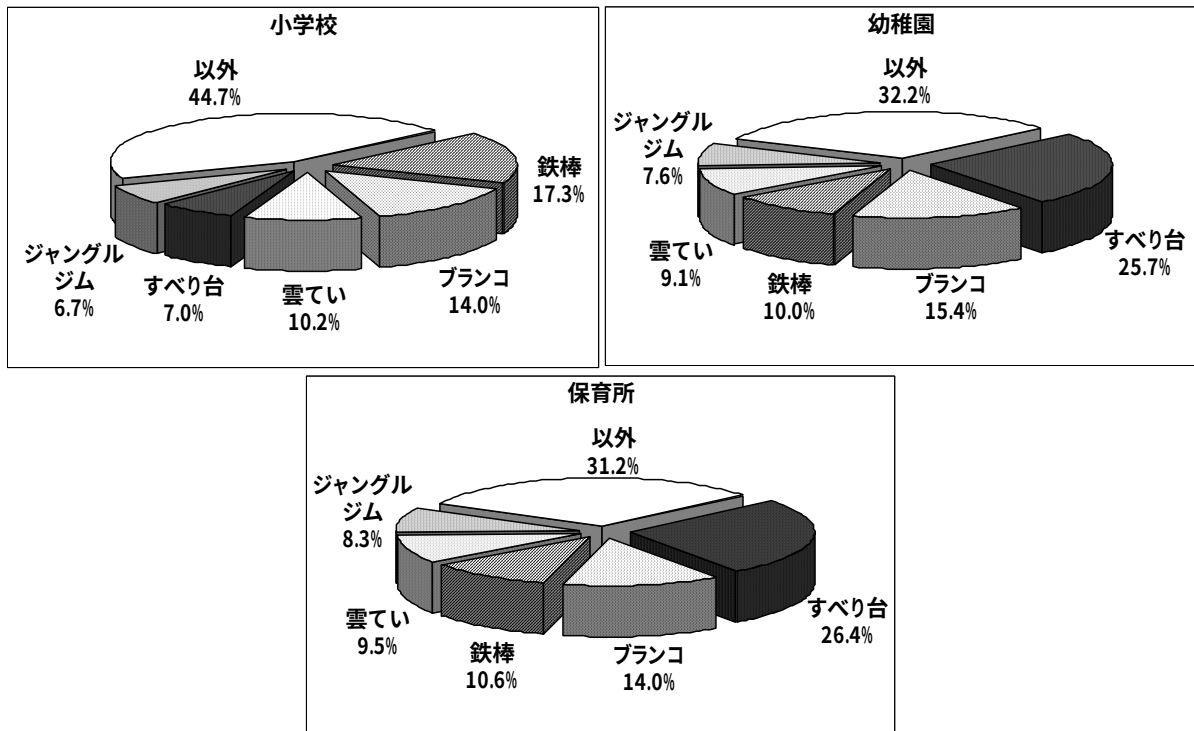


図 6-11 各所における体育用具・遊具別の発生割合

エ 事故事例

ここでは、遊具や機具の関連した事例について抽出し、まとめた。

〈死亡事例〉

- ・ 遊具から登り棒に飛び移った児童が、手を滑らせ高さ約2mから落下した。

(保育所)

〈負傷事例〉

- ・ 体育の跳び箱遊びの授業の際、本児童はふみこし2段の着地でバランスを崩し、手をついて落ちたとき、左手首を痛めた。(小1女児)
- ・ 体育館に移動するため昇降口を歩いていた際、後ろでつまずいた他の児童が倒れ、本児童の背中を押す形になった。本児童は転倒し、柱の角に頭をぶつけた。

(小3男児)

- ・ サッカーの練習試合中、相手の蹴ったボールが右眼に当たった。(小5男児)
- ・ 廊下の清掃中、掃き掃除をしていたところ、ほうきが他の男子児童に当たり、ふざけ半分にちゃんばらになった。ほうきを振り合っているうちに、ほうきの柄が本児童の左眼の横を引っかくような形で当たり負傷した。(小4女児)
- ・ 休憩時間中、人が乗っているブランコの下にボールをくぐらせて遊んでいた。くぐらせたボールがブランコの下で止まり、本児童がボールを取ろうとした時、ブランコの枠で前歯を打撲した。(小1男児)
- ・ 休憩時間に運動場にある懸垂型シーソーで遊んでいた。一人で中央に登り、手前のアームに両足をかけ、もう一方のアームに両手をそろえてゆらして遊んでいた時、バランスを崩して、両足の方が下がったために、とっさに左手を中央の横パイプに握り替えたので、アームと横パイプに左手小指を挟まれ、骨折した。(小3男児)

2 安全対策

ここでは、管理面・利用者面・施設面からの対策についてまとめた。また、いくつかの文献等から出されている利用者向けガイドについても掲載する。

(1) 管理面からの安全対策（参6）

遊び場や遊具を管理する立場では、どんなところに目を向ければいいのか。以下、文献からの抜粋である。

《公園管理者》

遊具の安全確保の基本的な考えに従って、計画・設計段階、製造・施行段階、維持管理段階、利用段階の各段階で遊具の安全が確保されるよう適切な対策を講ずるものとする。

事故が発生した場合は、事故の再発防止のための措置を講ずるとともに事故の発生状況を記録し、その後の遊具の維持管理に反映させる。

遊び場や遊具に関わる者と情報を共有・交換することが望まれる。

事故が発生した場合に備え、応急手当、負傷者周囲の安全確保など二次被害防止の他、ただちに必要な措置が講ぜられるよう、消防署や公園管理者への迅速かつ的確な連絡がとられるための手段を整えるなどの対策を講ずることも、遊具における安全確保においては重要である。

安全対策は、事故を未然に防ぐ努力を継続することが基本であるが、事故事例に学び、改善することも重要である。事故の再発を防止するためには、要因となったハザードを速やかに除去するとともに、事故の発生状況を記録し、公園利用者も含めて安全確保に関する意見交換を行うことが望まれる。

(2) 利用者面からの安全対策（参6）

ア 公園利用者（保護者・子ども）

子どもと保護者は、遊びには一定の自己責任が伴うものであることを認識することが必要である。

自己判断が十分でない年齢の子どもについては、その保護者は子どもに代って安全な利用に十分配慮し、安全確保に努めることが必要である。

イ 公園利用者（保護者・地域住民）

保護者は、子どもの遊びを見守り、危険な行動に対しては注意あるいは制止し、遊具の安全な利用について指導することが必要である。またハザードを発見した場合は公園管理者への連絡、事故が発生した場合には、必要な措置を講ずることが望まれる。

地域住民は、公園の利用の際には、子どもの遊びを見守り、危険な行動に対しては注意あるいは制止することが望まれる。またハザードを発見した場合は公園管理者への連絡、事故が発生した場合には、必要な措置を講ずることが望まれる。

ウ 児童（参9）

学校内での事故を防ぐためには、自分たち（児童）はどうすればいいか。これについて「安全な学校生活を考える本 1 校内でのけがから命を守ろう」から引用する。

1. 教室でけがをしないために

もっとも長い時間を過ごす教室では、それぞれが快適に安全に過ごすためには、以下のことが大切だと書かれている。

① 学級で話し合うークラスのルールづくり、けがの原因を考える**② 整理整とんを忘れずに、けがをふせぐ心が大切**

共通のルール、認識を持ち、なんでけがをしてしまうのか、それを防ぐためにはどうすればいいか、を自分たちで考えることが第一歩だといえる。

2. ろう下や階段などでけがをしないために

休み時間や移動の時間、たくさんの人がろう下や階段を行き来する。急いでいるからといって、ろう下を走ってしまうと大変なことになるかもしれない。

代表委員会で話し合う！**・原因を考え、ルールづくり ・ポスター、標語をつくろう**

学校全体のルールづくりが大切。ルールをアピールするために、ポスターや標語で見せることも大切な取り組みである。

3. 運動場でけがをしないために

授業時間、休み時間、いくつもの学年、たくさんの人が使う運動場、広いから何をしてもいい、というわけではない。そのためには…

遊具を正しく使う！遊びの約束を守る！低学年の人のことを考える！**4. 体育の時間に、けがをしないために****準備運動をしっかりとる！こんなことに気をつけよう**

- ・運動しやすいよう、体に合ったものを身に付ける
- ・ふざけたりせず、先生の注意をよく守る
- ・気分が悪かったり、けがをしたり調子が悪いときは無理をせず、休む

(3) 施設面からの安全対策（参6）

ここでは文献に書かれている設置面の安全領域について抜粋する。

《設置面について（安全領域と落下高さへの対応）》**ア 安全領域の確保**

- ・安全領域は、遊具を安全に利用するため、個別の遊具ごとに確保する。
- ・安全領域の標準的な範囲は、落下高さが600mmを超える場合、遊具の外形からあらゆる方向に1,800mm以上確保することとし、落下高さが600mm以下の場合、遊具の外形からあらゆる方向に1,500mm以上とする。
- ・安全領域の内部空間では、遊具本体を除き、衝突の危険となるような障害物や、つまづきなどの要因となるような異物（石やガラスなど）があってはならない。

イ 落下高さへの配慮

- ・ 落下高さは、転落による重度の傷害あるいは恒久的な障害を最小限とするため、その標準的な最大値を、幼児用では2,000mm以下、児童用では3,000mm以下となるように配慮する。
- ・ 安全領域内の設置面は、固い舗装とすることを避け、遊具の落下高さに見合った衝撃吸収性能を有する素材を選定し、敷設することが望ましい。

表 6-10 遊具の形態と落下高さ

遊具の形態	落下高さ
揺動系遊具（ぶらんこ）	吊金具の回転軸の高さ
振動系遊具(スプリング遊具)	着座姿勢の場合は座面高さ 立乗り姿勢の場合は立乗り面の高さ
上下動系遊具(シーソー)	可動時の座面の最高高さ
回転動系遊具(回転ジャングルジム)	最高到達部の高さ
滑降系遊具（すべり台、すべり棒）	踊り場（出発部の高さ）
滑走系遊具（ロープウェイ）	握り部の最高高さ
懸垂運動系遊具（雲梯、鉄棒）	握り部の上面高さ
登はん運動系遊具（ジャングルジム）	最高到達地点の高さ、または、設置面への直接落下が想定される高さ
複合系遊具	踊り場の高さ、および、各種遊具の形態の落下高さに従う

解 説：安全領域内の設置面素材としては、土・芝生・砂・ウッドチップ・各種合成材料などがあり、落下高さに応じた衝撃吸収性能を確保することが必要である。素材選定に際しては、衛生面からの安全性・耐候性・耐久性・維持管理の難易度などに配慮して選定するとともに、必要とする衝撃吸収性能が発揮できるように、素材に応じた敷設厚の設定を行う。

(4) 利用者向けガイド（参3）

ここまで遊びの危険、安全対策についてまとめてきたが、最後に、利用者向けに出されているガイドについてまとめる。

遊具の安全に関する規準（案）

《ミニ知識》楽しく遊ぶためのガイド

これは、社団法人日本施設業協会が提唱している、安全に遊ぶための基本的事項をまとめたものである。子どもとその保護者が、楽しく安全に遊ぶために必要な基本的事項を正しく理解していれば、事故はかなり防げるということから作られたものである。

○遊ぶ前に

- ・遊び場までの安全な道を選ぼう。
- ・子どもだけで遊ぶときは何時までどこで誰と遊ぶか保護者に知らせておこう。
- ・引っかけたり、脱げやすい衣服でなく、遊びやすい衣服を身につけよう。
- ・しめつけるおそれがあるので、ひも付きの衣服や手袋、肩掛けカバンを身につけるのはやめよう。
- ・足にあった靴をはき、ひも靴のひもは、しっかり結ぼう。
- ・体調が良くないときは、遊ぶのはやめよう。
- ・悪天候のときには遊ぶのはやめよう。とくに雷には注意しよう。

○遊び場のチェック

- ・安全な遊び場か、確かめておこう。
- ・乳幼児や幼児は、大きい子ども達とは別の場所で遊ぶようにしよう。
- ・落ちたときにケガをしないか、遊具の下の地面の状態を確かめよう。
- ・遊び場の石ころや、ガラスのかけらは取りのぞこう。
- ・壊れたり傷んだりしている遊具では、遊ばないようにしよう。

○それぞれの遊具での遊び方

《ぶらんこ》

- ・両手でくさりをにぎる。となり同士でつないだりしない。
- ・飛び降りない。
- ・座ってこぐ
- ・遊んでいるぶらんこに近寄らない。

《すべり台》

- ・階段から、手すりにつかまって登る。
- ・すべり面からは登らない。
- ・上でふざけない。
- ・一人ずつ、すわって足からすべる。
- ・降りたら次の人のために、脇によける。

《シーソー》

- ・お互いに協力して遊ぶ。
- ・自分の動きを伝え、相手の動きを確かめながら遊ぶ。
- ・勝手に飛び降りたりしない。
- ・取っ手につかまりバランスを保って遊ぶ。

《その他》

- ・両手を使って昇り降りする。
- ・押し合ったりしない。
- ・雨でぬれているときは、滑りやすいので注意する。

○ケガをしたら

- ・あわてないで、助けを呼ぶ。

- ・友だちが助けを呼ぶ間、つきそっている。
- ・ケガ人は、なるべく動かさない。
- ・ぶつけたところは、水で冷やす。
- ・血が出ていたら布で押さえるか、本人の手で押さえる。
- ・大量なら傷口の少し上部をしぼり、血をとめる。

この内容は、「仲良く遊ぼう安全に」というテキストにもまとめられている。幼児編は3～6歳の幼児を対象にしたテキストである。他の年代についても、同様にまとめられている。内容は、このテキストの目的や遊ぶ前の注意事項、代表的な遊具での注意事項、子どもが心得ておくこと、事故が起きたら、などの各項目がある。

第3 過去における調査研究報告書等に関すること

1 事故情報の概要 (参10)

実際にどんな事故が起きているのか。ここでは、2003年に国民生活センターがまとめた「危害情報からみた屋外遊具の事故」から挙げる。

(1) 事故概要

1997年度～2002年度に国民生活センターに寄せられた遊具に関する事故情報は1,799件であった。

そのうち、10歳未満の子どもは1,572人で全体の87.4%を占める。平均年齢は6.4歳であった。

性別では、男性1,065人、女性732人で、男女比はおおよそ3:2である。10歳以下はすべての年齢で男性が多かった。

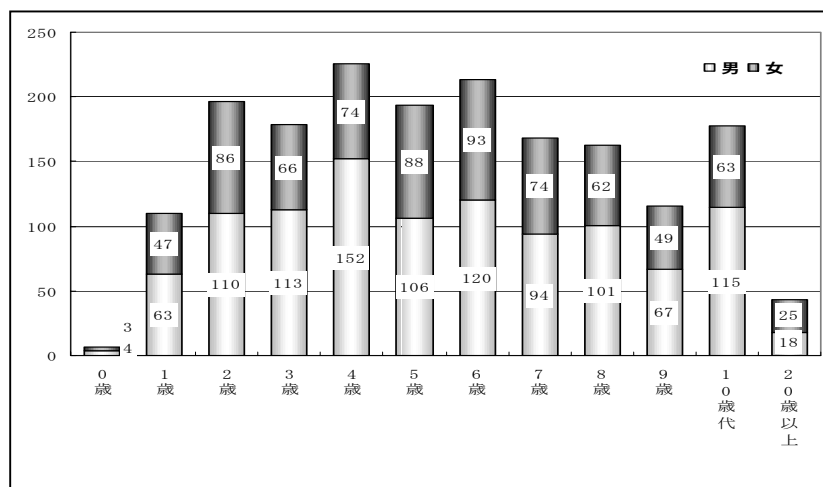


図 6-12 年齢別 遊具に関する事故情報報告件数

(2) 危害内容と危害部位

危害内容のうち最も多いのは擦過傷・挫傷・打撲傷 1, 320 件 (73.4%) で、続いて骨折 249 件 (13.8%) となっている。危害部位は頭部 1, 323 件 (73.5%) が最も多い。次いで、腕・手が 256 件 (14.2%) である。

危害部位別に危害内容をみると、頭部、脚部、体幹は擦過傷・挫傷・打撲傷が 1 位だったが、腕・手だけは骨折が 1 位だった。

表 6-11 危害内容と上位危害部位

	1位	件数	%	2位	件数	%	3位	件数	%	計
頭部	擦過傷・挫傷・打撲傷	1,121	84.7%	刺し傷・切り傷	140	10.6%	骨折	39	2.9%	1323
腕・手	骨折	176	68.8%	擦過傷・挫傷・打撲傷	50	19.5%	脱臼・捻挫	17	6.6%	256
脚部	擦過傷・挫傷・打撲傷	58	52.7%	骨折	28	25.5%	脱臼・捻挫	14	12.7%	110
体幹	擦過傷・挫傷・打撲傷	88	81.5%	内臓損傷	9	8.3%	骨折	6	5.6%	108

(3) 危害程度

危害程度がわかる病院情報 1, 788 件中、軽症 1, 568 件、重い症状 220 件であった。

表 6-12 遊具別事故件数と重い症状の割合

遊 具	重 い 症 状		総 件 数
	件 数	%	
う ん て い	11	22.0%	50
シ ー ソ ー	9	22.0%	41
鉄 棒	31	14.0%	221
ア ス レ チ ャ ッ ク 遊 具	5	13.9%	36
ジャングルジム	25	13.7%	182
すべり台	55	10.9%	504
ブランコ	42	8.5%	495
回旋塔	1	8.3%	12
遊 具 全 体	220	12.2%	1799

(4) 遊具の内訳

遊具の内訳は、すべり台 504 件が最も多く、次いでブランコ 495 件、鉄棒 221 件、ジャングルジム 182 件で、うんてい 50 件、シーソー 41 件、アスレチック遊具 36 件、回旋塔 12 件と続く。遊具の種類によって重い症状の割合が違っている。

(5) 年齢と危害程度、遊具の種類の関係

遊具全体の事故の平均年齢は 6.4 歳だった。遊具の種類別に平均年齢をみると、すべり台、ブランコ、ジャングルジムは 6 歳未満、鉄棒、アスレチック遊具は 9 歳以上と差があった。

遊具全体の重い症状の事故の平均年齢は 7.2 歳とやや高くなっている。しかし、うんてい、シーソーは 6 歳未満で低い。この遊具はそれぞれの遊具の平均年齢より重い症状の事故の平均年齢のほうが低くなっている。

遊具別に危害程度、危害内容、危害部位、平均年齢に特徴があり、グループ 1 とグループ 2 に分類した。

表 6-13 危害程度と遊具の種類の関係

	グループ1	グループ2
遊 具	うんてい、シーソー	鉄棒 アスレチック遊具 ジャングルジム ブランコ 回旋塔
危害程度	重い症状の割合が高い	重い症状の割合が低い
危害内容	グループ2に比べて骨折の割合が高い	グループ1に比べて擦過傷・挫傷・打撲傷の割合が高い
危害部位	グループ2に比べて腕・手の割合が高い傾向がある	グループ1に比べて頭部の割合が高い傾向がある

2 遊具の設置状況 (参11)

公共の遊びの場で、代表的な場所といえは「公園」が挙げられるのではないだろうか。では公園の遊具にはどんなものが多いのだろう。平成17年12月に国土交通省から「都市公園における遊戯施設の安全管理に関する調査の集計概要について」が公表された。これは、3年毎に都市公園及び地方公共団体が都市公園に準じて管理を行っているその他の公園等に設置されている遊具を調査対象に行われているものである。

以下、平成16年中の全国の都市公園等で多く設置されている遊具一覧についてまとめられたものである。

表 6-14 平成16年中の全国都市公園等の遊具設置数

	区 分	設置数
1	踏み板式ぶらんこ	69184
2	すべり台	67269
3	砂場	63415
4	鉄棒	44839
5	スプリング遊具	46044
6	シーソー	19326
7	ジャングルジム	15117
8	ゆりかご型ぶらんこ	3628
9	複合遊具（木製）	10551
10	複合遊具（鋼製）	10924
11	健康遊具	9618
12	フィールドアスレチック用遊具	7661
13	ラダー	7214
14	回転塔	4989
15	石山 人工的築山	4566
16	複合遊具（その他）	4777
17	吊り輪	567
18	その他	42698
	合計	432387

- (1) 設置数の多い遊具は、踏みぶらんこで全体の16.0%を占めており、続いてすべり台の15.6%、砂場の14.7%となっている。
- (2) 設置が増えた割合の大きい遊具は、健康遊具（32.9%増）、スプリング遊具（22.4%増）、複合遊具（22.0%増）であった。
- (3) 一方、設置数が減った割合の大きい遊具は、ゆりかご型ぶらんこで72.2%減、吊り輪で42.1%減、回転塔（16.9%減）となっている。
- (4) 遊具全体としては、前回の調査（平成13年）を100とすると、今回は103.2となり、増加している。

3 遊具の安全性 (参12)

全国34都道府県・指定都市に連絡会を置く母親クラブが調査し、全国地域活動協議会がまとめたものを以下に記す。

表 6-15 不具合遊具等の有る遊び場数・割合—遊び場別

遊具・設備	①街区公園			②児童遊園			③児童館			④団地・マンション内遊び場		
	ア	イ	割合	ア	イ	割合	ア	イ	割合	ア	イ	割合
① すべり台	699	280	40.1%	158	64	40.5%	146	62	42.5%	95	32	33.7%
② ブランコ	646	261	40.4%	151	67	44.4%	115	48	41.7%	87	32	36.8%
③ シーソー	219	105	47.9%	52	31	59.6%	41	16	39.0%	23	12	52.2%
④ ジャングルジム	187	74	39.6%	57	14	24.6%	73	24	32.9%	32	5	15.6%
⑤ 鉄 棒	401	95	23.7%	107	38	35.5%	100	26	26.0%	54	15	27.8%
⑥ スプリング遊具	168	56	33.3%	36	11	30.6%	52	19	36.5%	18	3	16.7%
⑦ 複合遊具	210	109	51.9%	58	31	53.4%	47	23	48.9%	15	10	66.7%
⑧ はん登棒・登り棒	63	22	34.9%	20	4	20.0%	29	5	17.2%	4	2	50.0%
⑨ うんてい・ラダー	100	31	31.0%	40	13	32.5%	78	28	35.9%	13	2	15.4%
⑩ 砂 場	508	76	15.0%	94	10	10.6%	115	17	14.8%	71	14	19.7%
⑪ 他の遊具	241	104	43.2%	54	29	53.7%	65	31	47.7%	20	5	25.0%
⑫ ベンチ・腰掛け	682	169	24.8%	132	32	24.2%	92	20	21.7%	84	24	28.6%
⑬ 便 所	418	44	10.5%	80	6	7.5%	50	4	8.0%	10	0	0.0%
⑭ 飲料水設備	501	44	8.8%	80	9	11.3%	79	12	15.2%	30	4	13.3%
⑮ 柵・フェンス	534	94	17.6%	110	15	13.6%	99	29	29.3%	56	12	21.4%
⑯ あずまや・バーゴラ	263	35	13.3%	46	5	10.9%	29	4	13.8%	20	6	30.0%
⑰ 他の設備	111	55	49.5%	18	7	38.9%	23	13	56.5%	11	6	54.5%

遊具・設備	⑤市民館・公民館広場			⑥寺院・境内遊び場			⑦その他の遊び場		
	ア	イ	割合	ア	イ	割合	ア	イ	割合
① すべり台	39	14	35.9%	41	18	43.9%	108	38	35.2%
② ブランコ	46	14	30.4%	45	15	33.3%	106	40	37.7%
③ シーソー	13	2	15.4%	13	6	46.2%	24	8	33.3%
④ ジャングルジム	11	3	27.3%	19	7	36.8%	50	18	36.0%
⑤ 鉄 棒	34	5	14.7%	34	4	11.8%	68	15	22.1%
⑥ スプリング遊具	6	3	50.0%	3	1	33.3%	23	10	43.5%
⑦ 複合遊具	10	3	30.0%	3	1	33.3%	47	20	42.6%
⑧ はん登棒・登り棒	7	1	14.3%	3	2	66.7%	25	7	28.0%
⑨ うんてい・ラダー	6	0	0.0%	9	3	33.3%	31	14	45.2%
⑩ 砂 場	16	1	6.3%	8	0	0.0%	62	2	3.2%
⑪ 他の遊具	10	6	60.0%	13	5	38.5%	39	19	48.7%
⑫ ベンチ・腰掛け	29	5	17.2%	18	4	22.2%	85	18	21.2%
⑬ 便 所	15	0	0.0%	12	2	16.7%	48	2	4.2%
⑭ 飲料水設備	13	0	0.0%	10	0	0.0%	53	6	11.3%
⑮ 柵・フェンス	26	2	7.7%	15	2	13.3%	71	15	21.1%
⑯ あずまや・バーゴラ	5	0	0.0%	4	1	25.0%	42	4	9.5%
⑰ 他の設備	4	0	0.0%	5	0	0.0%	25	7	28.0%

ア: 遊具・設備が
設置されてい
る遊び場数

イ: 不具合遊具・
設備の有る
遊び場数

表 6-15 の①～⑦は、遊び場別にみた不具合のある遊具・設備の割合である。街区公園、児童遊園、団地・マンション内遊び場では、複合遊具の不具合の割合が高い。また、児童遊園、団地・マンション内遊び場では、シーソーに不具合が多い。

表 6-16 遊具・設備等にみた安全性—不具合状況

診断区分				基準診断				利用診断		劣化診断	
No.				1	2	3	4	5	6	7	8
遊具・設備	設置 公園数	不具合 公園数	割合	鋭い突端・角・縁 がある	突起や引っ掛かり がある	顔・首・手指などが 挟み込まれるよう な構造がある	遊具の基礎が 露出している	幼児に適切な 監督がされて いない	利用対象年齢に 合わない遊具で 遊んでいる	腐れ・ひび・剥け 等の劣化／着地 部に痛みがある	遊具・設備の一部 やネジが取れてい たり緩んでいる
① すべり台	1,229	526	39.6%	43 (3.5)	92 (7.5)	76 (6.2)	126 (10.2)	27 (2.2)	30 (2.4)	342 (27.8)	59 (4.8)
② ブランコ	1,238	493	39.8%	7 (0.6)	26 (2.1)	27 (2.2)	106 (8.6)	23 (1.9)	16 (1.3)	342 (27.7)	87 (7.0)
③ シーソー	294	184	62.6%	21 (7.1)	22 (7.5)	18 (6.1)	25 (8.5)	7 (2.4)	2 (0.7)	338 (115.0)	54 (18.4)
④ ジャンダルジム	429	148	34.5%	7 (1.6)	19 (4.4)	12 (2.8)	31 (7.2)	5 (1.2)	3 (0.7)	96 (22.4)	19 (4.4)
⑤ 鉄 棒	825	204	24.7%	8 (1.0)	28 (3.4)	3 (0.4)	81 (9.8)	7 (0.8)	4 (0.5)	93 (11.3)	34 (4.1)
⑥ スプリング遊具	312	104	33.3%	2 (0.6)	13 (4.2)	14 (4.5)	26 (8.3)	1 (0.3)	10 (3.2)	56 (18.0)	29 (9.3)
⑦ 複合遊具	406	202	49.8%	14 (3.5)	39 (9.6)	37 (9.1)	43 (10.6)	15 (3.7)	17 (4.2)	128 (31.5)	55 (13.6)
⑧ はん登棒・登り棒	159	44	27.7%	2 (1.3)	1 (0.6)	8 (5.0)	10 (6.3)	0 (0.0)	2 (1.3)	25 (15.7)	10 (6.3)
⑨ うんてい・ラダー	293	93	31.7%	5 (1.7)	14 (4.8)	2 (0.7)	21 (7.2)	3 (1.0)	1 (0.3)	63 (21.5)	14 (4.8)
⑩ 砂 場	902	122	13.5%	11 (1.2)	13 (1.4)	2 (0.2)	42 (4.7)			66 (7.3)	8 (0.9)
⑪ 他の遊具	460	205	44.6%	15 (3.3)	29 (6.3)	44 (9.6)	38 (8.3)	19 (4.1)	12 (2.6)	115 (25.0)	49 (10.7)
⑫ ベンチ・腰掛け	1,154	281	24.4%	26 (2.3)	81 (7.0)					215 (18.6)	58 (5.0)
⑬ 便 所	654	63	9.6%	3 (0.5)	3 (0.5)					41 (6.3)	22 (3.4)
⑭ 飲料水設備	785	77	9.8%	6 (0.8)	9 (1.1)					41 (5.2)	30 (3.8)
⑮ 覆・フェンス	937	175	18.7%	46 (4.9)	73 (7.8)					116 (12.4)	40 (4.3)
⑯ あげまや・パーゴラ	422	56	13.3%	6 (1.4)	7 (1.7)					42 (10.0)	9 (2.1)
⑰ 他の設備	293	90	30.7%	17 (5.8)	38 (12.9)					45 (15.4)	15 (5.1)

※ () 内は不具合公園数に対する割合 (%)

上記の表は、代表的な遊具、ベンチ、便所、飲料水設備、柵等の設備別にみた安全性—不具合の有無、不具合な内容についてまとめた結果である。

最も不具合率が高い遊具は、「複合遊具 (56.0%)」である。その具体的な状況を見ると、腐れ・ひび等の劣化、着地部の窪み (63.1%) である。また、部位やネジが取れていたり、緩んでいる割合も他の遊具と比べて、「突起や引っ掛かり」「顔・首・手指などが挟み込まれるような場所がある」という構造面のハザードがやや多く報告されている。

点検対象として最も多かった「すべり台」と「シーソー」は、不具合率が 40.0% を超えており、複合遊具と同様に腐れ・ひび等の劣化、着地部の窪み、部位やネジの抜け落ちや緩み等の劣化が最も多い。ブランコ、ジャンダルジム、スプリング遊具、登り棒等では、30～40% に不具合があると報告されている。これらの遊具についても、劣化が最も多い。「鋭い突端・角・縁がある」割合が最も多い遊具として、「砂場」が挙げられている。これは、コンクリート製縁石の破損が主なものと考えられる。

遊具以外の設備については、ベンチ・腰掛けを除き、不具合率は低い。遊具と同じく腐れ・ひび等が最も多い。

4 人口動態統計年報から (参13)

平成 16 年度人口動態統計年報によると、死亡順位別にみた年齢階級・死亡率は次のとおりである。

表 6-17 死亡順位別にみた年齢階級・死亡率

年齢階級	第 1 位			第 2 位			第 3 位		
	死 因	死亡数	割合	死 因	死亡数	割合	死 因	死亡数	割合
0 歳	先天奇形、変形及び染色体異常	1185	38.0%	呼吸障害及び心血管障害	421	13.5%	乳幼児突然死症候群	214	6.9%
1～4 歳	不慮の事故	278	24.0%	先天奇形、変形及び染色体異常	198	17.1%	悪性新生物	109	9.4%
5～9 歳	不慮の事故	207	34.1%	悪性新生物	104	17.1%	その他の新生物	40	6.6%
10～14 歳	不慮の事故	149	25.3%	悪性新生物	123	20.9%	自殺	49	8.3%

各年齢階級の死因の第1位～第3位は上記のとおりである。0歳では、1～3位は外因というよりは内因的なものの死亡が多いといえる。1～4歳、5～9歳、10～14歳の第1位はいずれも不慮の事故である。各年齢階級における割合も順に、24.0%、34.1%、25.3%とかなり高い割合を占めている。なお、0歳の不慮の事故は第5位である。

次に、不慮の事故に焦点をあててみる。家庭内における主な不慮の事故の種類別にみた年齢別死亡数・構成割合によると以下のとおりである。

表 6-18 家庭内における主な不慮の事故の種類別にみた年齢階級別死亡数・構成割合

死 因	0歳		1～4歳		5～9歳		10～14歳	
	死亡数	割合	死亡数	割合	死亡数	割合	死亡数	割合
総 数	112		120		39		41	
不慮の溺死及び溺水	16	14.3%	32	26.7%	3	7.7%	9	22.0%
浴槽内での溺死及び溺水	13	11.6%	20	16.7%	2	5.1%	9	22.0%
浴槽内への転落による溺死及び溺水	3	2.7%	7	5.8%				
その他の不慮の窒息	88	78.6%	38	31.7%	10	25.6%	8	19.5%
胃内容物の誤えん	24	21.4%	5	4.2%	2	5.1%	4	9.8%
気道閉塞を生じた食物の誤えん	15	13.4%	13	10.8%	2	5.1%	1	2.4%
気道閉塞を生じたその他の物体の誤えん	5	4.5%	5	4.2%	2	5.1%		

0歳では112人の死亡のうち、胃内容物や、気道閉塞を生じた食物・その他物体の誤えんを含めた、その他の不慮の窒息によるものが88人、78.6%と非常に高い割合を占めている。不慮の溺死及び溺水によるものは、16人、14.3%となっており、家庭内の不慮の事故に占めるその他の不慮の窒息と不慮の溺死及び溺水の割合は104人、92.3%と9割以上となっている。

1～4歳では120人の死亡のうち、その他の不慮の窒息が38人、31.7%、不慮の溺死及び溺水が32人、26.7%となっている。この2つの、1～4歳の死亡総数に占める割合は70人、58.3%となっており、約6割となっている。

5～9歳では39人の死亡のうち、その他の不慮の事故によるものは10人、25.6%と4分の1以上になっている。反面、0歳、1～4歳に多かった不慮の溺死及び溺水は3人、7.7%と割合は少なくなっている。この2つの5～9歳の死亡総数に占める割合は33.3%である。

10～14歳では41人の死亡のうち、不慮の溺死及び溺水によるものが9人、22.0%でいずれも浴槽内での溺死及び溺水である。また、その他の不慮の窒息は8人、19.5%となっている。この2つの10～14歳の死亡総数に占める割合は17人、41.5%である。

5 異物・誤飲について (参14)

平成17年に「平成16年度家庭用品に係る健康被害病院モニター報告」の中で異物・誤飲事故に関する報告が出されているので、ここに抜粋する。

○ 家庭用品等に係る小児の誤飲事故に関する報告から

(1) 原因家庭用品等種別の動向

小児の誤飲事故の原因製品として、「タバコ」が226件(36.1%)と最も多かった。次いで、「医薬品・医薬部外品」が97件(15.1%)となっており、上位2製品の合計は51.2%と半数を超える。その他の原因製品は以下の表のとおりである。

表 6-19 上位10品目 家庭用品等の小児の誤飲事故のべ報告件数

	家庭用品等	事故報告件数	%
1	タバコ	226	36.1
2	医薬品・医薬部外品	97	15.5
3	玩具	46	7.3
	金属製品	46	7.3
5	プラスチック製品	28	4.5
6	洗剤・洗浄剤	24	3.8
7	化粧品	22	3.5
8	電池	21	3.4
9	硬貨	20	3.2
10	食品類	19	3.0
	総 計	626	100.0

(2) 各項目報告の動向

年齢別では、6か月～11か月が最も多く232件（37.1%）であり、次いで多いのが12か月～17か月が145件（23.2%）である。

誤飲事故発生時刻では、例年同様、夕刻以降に発生件数が増加するという傾向がみられ、午後4時から10時の時間帯の合計は304件（52.2%：不明を除く報告件数に対する%）であった。曜日間による差は特に見られなかった。

(3) 小児の誤飲事故の傾向

小児による誤飲事故は減少傾向にあるものの相変わらずタバコによるものが多い。タバコの誤飲事故は生後6か月からの1年間に発生時期が集中しており、この1年間にタバコの管理に特段の注意を払うだけでも相当の被害の軽減が図れるはずである。

一方、医薬品の誤飲事故はむしろこれよりも高い年代での誤飲が多い。それ自体が薬理作用を有し、子供が誤飲すれば健康被害が発現する可能性が高いものなのでその管理には特別の注意を払う必要がある。

食品であっても、気道を詰まらせ、重篤な事故になるものもあるので、のどに入るような大きさ・形をした物品には注意を怠らないように努めることが重要である。また、酒類にも注意が必要である。

小児による誤飲事故の発生時間帯は夕刻以降の家族の団らんの時間帯に半数近くが集中しているという傾向が続いている。保護者が近くにいても、乳幼児はちょっとした隙に、身の回りのものを分別なく口に入れてしまうので注意が必要である。

一方、保育所や幼稚園等、多数の子供が生活している施設で起こった誤飲の報告事例は少数で、このことから、誤飲は避けられない事故ではなく、誤飲をする可能性があるものを極力子供が手にする可能性のある場所に置かないことが最も有効な対策であることがうかがい知れる。

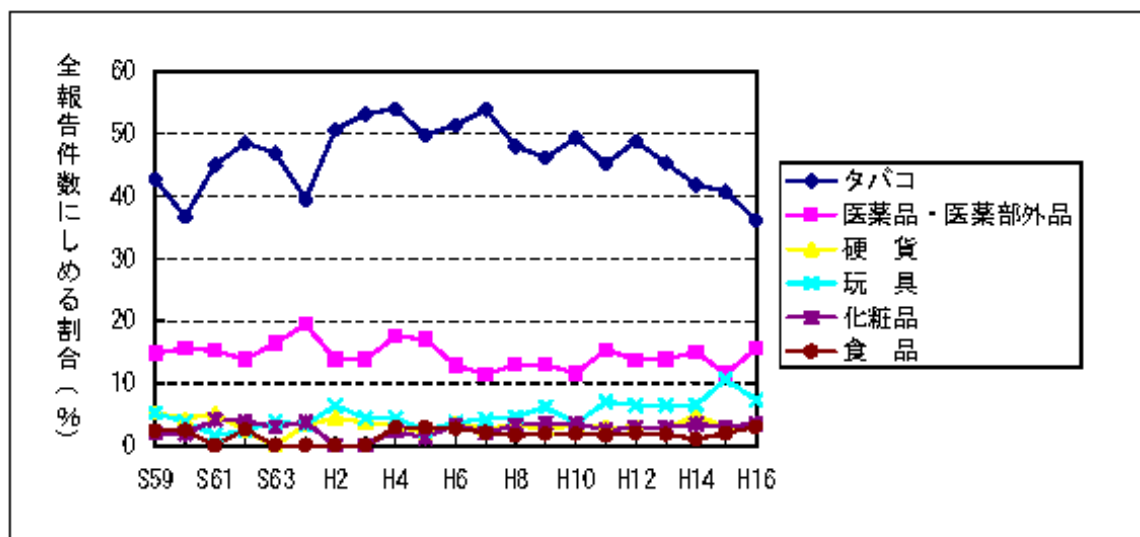


図 6-13 小児の家庭用品等誤飲事故報告件数比率の年度別推移

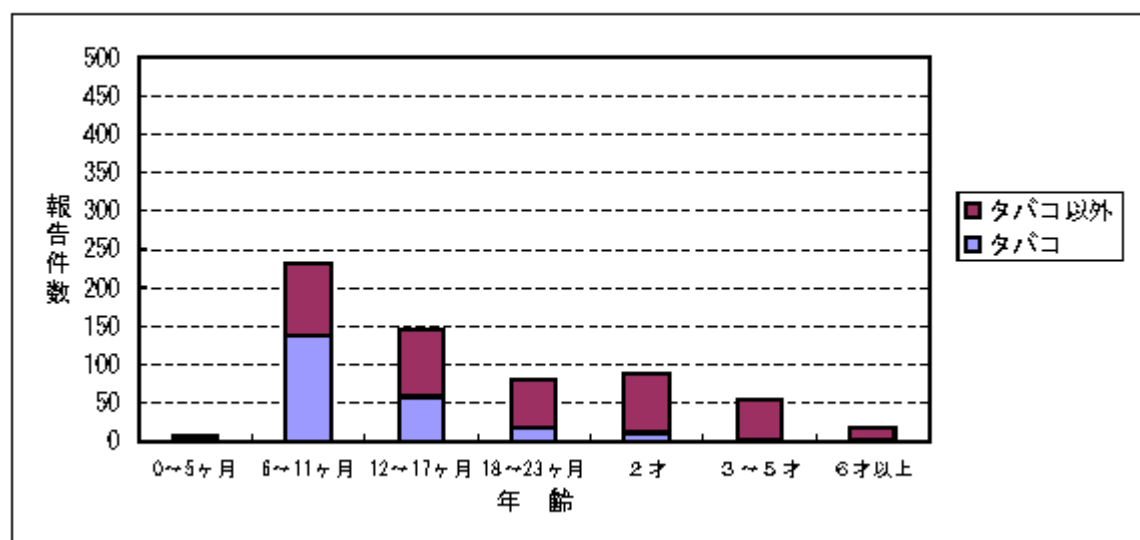


図 6-14 年齢別誤飲事故報告件数

6 救命講習受講状況（参15、16）

東京消防庁救急部まとめ「救命講習受講状況」について次に記す。

なお、ここでの救命講習とは応急救護講習、普通救命講習・上級救命講習（再講習含む）の3つとし、過去5年間の普及状況をまとめた。年平均550,017人が講習を受けている状況である。

平成17年の普及人員は、応急救護講習が445,701人、普通救命講習が130,016人、上級救命講習が30,905人で合計606,622人となり、平均と比べると約5万人増となっている。

表 6-20 過去5年間の救命講習の普及状況

種別 年	応急救護講習	普通救命講習	上級救命講習	合計
平成12年	480,871	98,452	23,332	602,655
平成13年	434,332	104,006	26,943	565,281
平成14年	384,670	110,802	24,889	520,361
平成15年	381,523	121,820	26,017	529,360
平成16年	380,239	124,553	27,637	532,429
合 計	2,061,635	559,633	128,818	2,750,086

次に、平成16年の東京都の人口を、東京都の人口推計(東京都総務局統計部人口統計課平成16年12月1日まとめ)から引用した。

表 6-21 東京都の人口(推計)

種別 地域	男	女	総 数
区 部	4,165,411	4,230,965	8,396,376
市 部	1,999,375	1,980,396	3,979,771
郡 部	29,828	29,875	59,703
島 部	13,575	13,024	26,599
総 数	6,207,831	6,253,987	12,461,818

上記の表 6-18 の平成16年の普及人数と表 6-19 の東京都の人口(推計)から、東京都の普及率を出してみたところ、平成16年中の東京都の人口(推計)における救命講習の受講人員の割合は4.3%となった。救命講習の普及状況は延べ人数であるので、正確な値とはいえないが、100人あたり4.3人が救命講習に参加していることになる。

子供が事故にあったとき、一番身近にいる大人に対応する力が求められるのではないだろうか。

【参考文献】

- 参1. 若井邦夫・高橋道子・高橋義信・城谷ゆかり「乳幼児発達心理学 人生最初期の発達を考える」サイエンス社、P.165-173、1994年
- 参2. 高橋道子・藤崎真知代・仲真紀子・野田幸江「子どもの発達心理学」新曜社、P.47-48、1993年
- 参3. (社)日本公園施設業協会「遊具の安全に関する規準(案) JPFA-S:2002」P.9
2002年
- 参4. 東京都教育委員会「平成16年度東京都児童・生徒の体力テスト調査報告書」
2005年
- 参5. 文部科学省「平成16年度体力・運動能力調査結果」2005年
- 参6. 国土交通省「都市公園における遊具の安全確保に関する指針」及び
「都市公園における遊具の安全確保に関する指針(解説版)」
- 参7. 独立行政法人日本スポーツ振興センター
「学校の管理下の災害－19 基本統計」P.24-25,33,145,165、2004年
- 参8. 独立行政法人日本スポーツ振興センター
「学校の管理下の死亡・障害事例の事故防止の留意点」P.60,111-245、2005年
- 参9. 小林元子「安全な学校生活を考える本1 校内でのけがから命を守ろう」
小峯書店、2002年
- 参10. 国民生活センター「危害情報からみた屋外事故」P.1-7、2003年
- 参11. 国土交通省都市・地域整備局公園緑地課
「都市公園における遊戯施設の安全管理に関する調査の集計概要について」2005年
- 参12. みらい子育てネット 全国地域活動連絡協議会
『母親クラブによる「遊び場安全点検週間」結果報告書 平成17年度』P.7,20、2005年
- 参13. 厚生労働省「平成16年度人口動態統計年報」2005年
- 参14. 厚生労働省「平成16年度家庭用品に係る健康被害病院モニター報告」
P.14-24、2005年
- 参15. 東京消防庁救急部「救命講習の普及状況」2006年
- 参16. 東京都総務局統計部人口統計課
「住民基本台帳による東京都の世帯と人口」2005年

